



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アルタイ型言語における「補助動詞」の分布について
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方言語研究, 11, 123-152
Issue Date	2021-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/97222
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80941
Type	departmental bulletin paper
File Information	NoLS11_03_123_ShinjiroKAZAMA.pdf



アルタイ型言語における「補助動詞」の分布について

風 間 伸 次 郎
(東京外国語大学)

キーワード：補助動詞、アルタイ型言語、言語類型論、言語接触

0. はじめに

アルタイ諸言語及びその周辺のアルタイ型の言語（亀井・河野・千野（編）（1996: 499）および風間（2014）を参照）の一部では、補助動詞と呼ばれる一連の動詞がみられる。本稿では広く上記諸言語における補助動詞の分布を調べ、次の3つの観点からの解明を目指す。

1. [言語接触の観点からの分析] 影響による系統を越えた連続性や、地域的に偏った分布が見られるか？
2. [語族間での対照言語学的な観点からの分析] 影響等を取り除いた結果、各語（族）でどのような歴史的変遷があったと考えられるか？ 各語（族）の補助動詞に、他と比べて異なった特徴が観察されるか？
3. [言語類型論的な観点からの分析] 通言語的に文法化しやすいといわれる動詞と比べて、この地域にみられる特別な特徴は観察されるか？ またその逆はあるか？

本稿での「補助動詞」とは、基本的に「副動詞形もしくはそれに類する形式の動詞に後続し、（他方で独立しても用いられて本来の語彙的意味を保持しつつ）文法的な機能¹を実現するもの」と定義しておくこととする。したがって本稿では「複合動詞」と呼ばれるもの（例えば日本語の「書き始める」における「始める」など）や形動詞形／終止形に後続するものは基本的に直接の対象とはしない。ただし上記の定義に当てはまらないものでも、機能的に補助動詞と関連していると考えられるものであれば、形動詞形などに後続するものや補助動詞が歴史的に接辞化したものも広く視野に入れ、補助動詞を扱う際の参考にする。

対象の中心とする言語はアルタイ諸言語及び朝鮮語、日本語である。これらの言語に影響を与えた言語、もしくは影響を受けた言語として対象言語の周辺に位置する（主にアルタイ型の）言語にも注意を払う。

1. 先行研究

1.1. 言語類型論的な観点からの先行研究

Heine and Kuteva (2002) は約 500 の言語のデータを基に 400 以上の文法化の過程を示している。Heine and Kuteva (2002: 317-326) の Source-Target² List から Source に動詞的な意味が記されているもののみを抜き出してみると 32 の動詞が見出される（3.3.4. 節で示す）。

¹ 意味についての判断には難しい面がある。そのため本稿の以下における記述においては、「文法的な」機能になっているか否か、「語彙的意味」がどの程度保持されているといえるか、などの問題については恣意的な判断をせざるを得なくなっている個所のあることをおことわりしておく。

² Heine (2002) や Anderson (2006) にしたがって、本稿では補助動詞が独立した動詞として使われた場合の意味を ‘Source’、補助動詞として使われた場合に実現する（文法的）機能を ‘Target’ と呼ぶ。

Anderson (2006: 332-373) では約 800 の言語のデータに基づき補助動詞を研究し、5 種類の図式を提案している（同じく 3.3.4. 節で示す）。その中にはチュルク諸語をはじめとするアルタイ諸言語からのデータも多く含まれている。

本稿ではこれらの先行研究の成果をひとまず通言語的な補助動詞における文法化の指標とし、本稿で扱う言語の補助動詞が示す傾向の判断基準とする。

1. 2. 言語地域に関する先行研究

Masica (1976: 141-158) は [1]「説明的複雑動詞」(Explicator compound verb) として、本稿で扱う補助動詞（による構造）、および機能的にこれに類似するいくつかの現象を取り扱っている。インドには語族を問わず、'conjunctive participle'（風間 (2014: 165)）に文法化した動詞が後続する構造があるという。このような「インドタイプの説明的複雑動詞」はタジク語（インド・イラン語派）やウズベク語、キルギス語、モンゴル語などを經由して朝鮮語や日本語へと連続する地域に分布するとしている。

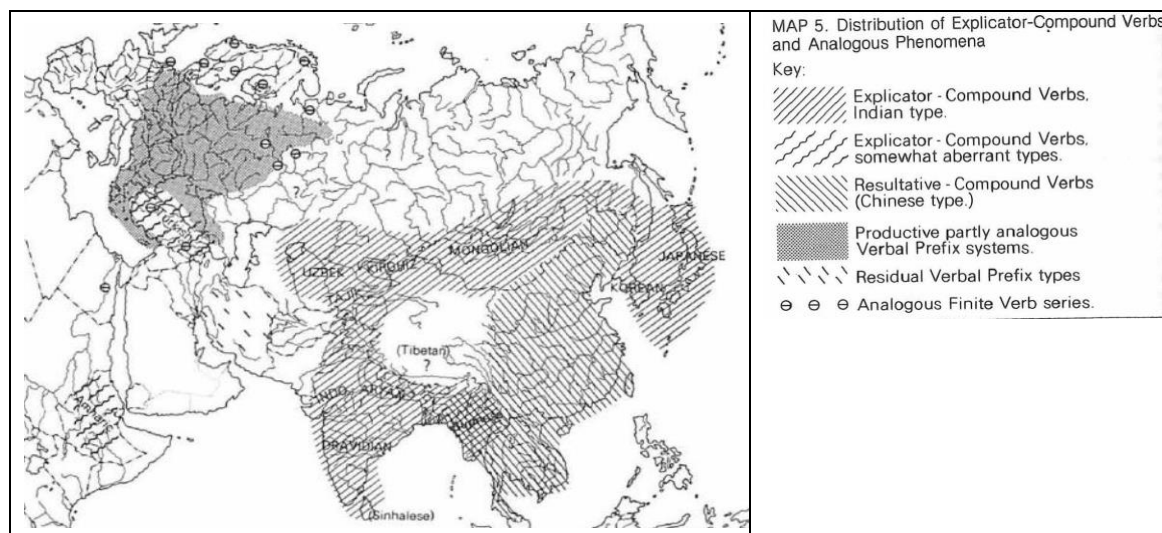


図 1：説明的複雑動詞の分布と類似の現象（Masica (1976: 150-151)）

(distribution of Explicator-Compound Verbs and Analogous Phenomena)

Masica (1976: 141-158) はインドの諸言語（ヒンディー、パンジャービー、カシュミール、マラーティー、ベンガル、テルグ、マラヤーラム、タミール、シンハラ）について GO, COME, RISE, FALL, SIT, MOVE, GIVE, TAKE, PUT/KEEP, THROW, LEAVE, RELEASE, SEE（以下本稿全体をつうじて英大文字の動詞は Source としての語彙的意味を示すものとする）の補助動詞についてその言語間の分布を示し、さらにタジク語、ウズベク語、キルギス語、トルコ語、モンゴル語、朝鮮語、日本語、ビルマ語、サンタール語（オーストロアジア語族ムンダ語派）については上記に COME OUT, LIE, STAND, PASS, REMAIN, BE USED UP, SHOW, SEND, WEAR, WRITE, FINISH を加えて整理した表を示している（Masica (1976: 146-147)）。表では上記の動詞の文法化した意味をそれぞれ GO（'completion'）, COME（'completion with relevance to present time or place'）, RISE（'suddenness; inception'）, FALL（'suddenness; accident'）,

SIT ('regret; stubbornness, etc.), MOVE ('departure?'), GIVE ('away from subject + "benefactive"'), TAKE (toward subject: "reflexive"), PUT/KEEP ('forethought + "completion"'), THROW ('completion + violence'), LEAVE/RELEASE ('completion + ?'), SEE ('attempt to, try') のように記述している。

このような「インドタイプの説明的複雑動詞」の後項動詞(すなわち本稿でいう補助動詞)が示す機能は modal もしくは aspectual なもので、詳しくは上記のように完遂(completion)、急激さ(suddenness)、方向性(directionality)、恩恵(benefaction)、強意(intensity)、破壊(violence)、頑強さ(stubbornness)、不本意(reluctance)、後悔(regret)、用心(forethought)、一貫性(thoroughness)などであるとしている。

説明的複雑動詞に類似した現象としてはさらに次のようなものを取り上げている ([1]と[4]のタイプの例は省略した) :

- [1] 若干変形した説明的複雑動詞 (Explicator compound verb, somewhat aberrant type, 図 1 のアナトリア・エチオピアに分布するタイプ)
- [2] 結果補語など (Resultative-compound verbs (Chinese type), 図 1 において中国から東南アジア大陸部に分布するタイプ) — 例えば中国語の見 *jian*4、完 *wan*2、来 *lai*2、去 *qu*4、上 *shang*4、下 *xia*4、进 *jin*4、出 *chu*1、过 *guo*4、回 *hui*4、开 *kai*1、など。
- [3] 生産的で一部類似した動詞接頭辞のシステム (Productive partly analogous Verbal Prefix systems, 図 1 の中欧・東欧やバルカン、カフカースに分布しているタイプ) — 例えばドイツ語の *ver-* 'completeness', *ent-* 'inception', *zer-* 'violence' など。
- [4] 残存的な動詞接頭辞 (Residual Verbal Prefix types, 西欧、イランに分布するタイプ)
- [5] 類似した定形動詞の連続 (Analogous finite verb series, 図 1 における *e* のマークの地域の言語) — 例えばロシア語の *Poezd vzjal da ushol*. [train took yes left] 「汽車は突然に去った」の *vzjal* (「取る」の意の動詞の過去形である) など。

上記のうち、中国語にある[3]の現象は、本稿で扱っている中国周辺の言語にも少なからぬ影響を与えたのではないかと考える。Masica (1976) が提案する補助動詞に関する言語圏の仮説については、3.1. 節でその妥当性を検討する。

1. 3. 語族内部の補助動詞の分布や歴史に関する先行研究

チュルク諸語に関して、語族内部の補助動詞の分布や歴史に関する先行研究が見出される。

Johanson (2002) はチュルク諸語とその近隣諸言語との言語接触に関する包括的な研究である。Johanson (2002: 91-97) の "3.3.2. Postverbal constructions" では補助動詞を扱っている。その内容のうち、本稿と関連が深いと思われる記述を要約し、以下箇条書きにして示す。

- ・補助動詞による構造はふつうアスペクト³を示す。
- ・補助動詞による構造は接辞化への中間段階を示す。一部は融合し接辞化するなどして一語

³ Johanson (2002) は *actionality* という用語を用いている。本稿では *aktionsart* や *actionality* と呼ばれているものを以下「アスペクト」の用語で統一する。ここでの「アスペクト」は完了・不完了の対立のみによる文法カテゴリーを指すものでなく、局面をはじめとする時間軸上における動作の現れ方を広く扱う文法カテゴリーとする。

となっている。

- ・ホラズム朝のイラン語派の言語（13-14 世紀に消滅）にはチュルク諸語からの影響により補助動詞構造が生じた。
- ・タジク語にはウズベク語からの影響により、COME OUT, GIVE, SEE, SEND, TAKE, MOVE, STAY, THROW, GO THROUGH, GO, BECOME による補助動詞が生じた。
- ・ハルハ・モンゴル語に orxi-「見捨てる」が接辞化⁴して完了を示す -čix- がある（チュルクの言語とモンゴルの言語のどちらからどちらへの影響であるかについては触れていない）。
- ・フィン・ウゴル諸語のうちマリ語は隣接するチュヴァシ語やタタール語と同様に補助動詞を使用する。
- ・他方、ハラジ語など、ペルシア語の影響を強力に受けたチュルク諸語では副動詞の使用を避け、補助動詞構造も使われなくなっている。
- ・チュルク諸語における補助動詞構造は比較的最近に発達したものである可能性がある。今日でもいくつかの周辺領域の言語（例えばトルコ語）では補助動詞構造が希薄である。少なくとも補助動詞は古いアルタイ共通⁵の語系（stock）を構成しそうにない。ツングース諸語のアスペクトはあまり補助動詞構造をとらない。補助動詞構造はかつて接辞による統合的（synthetic）な表現であったアスペクトの機能の一部をその構造によって置き換えた。

大崎 (2017) は次のように述べている。progressive, continuative を示す LIE DOWN, SIT DOWN, STAND, WALK/GO の補助動詞はチュルク語全体にみられるが、主動詞との結合程度、定型性の度合いが動詞間、言語間で異なる。主動詞との結合の強さは LIE DOWN が最も顕著であるが、文法化の進行の度合いに関しては LIE DOWN よりも STAND の方が古い。LIE DOWN はハカス語、ウズベク語で接尾辞化している。

2. 諸補助動詞の系統的・地理的分布

本節では 2.1. で表 1: [チュルク諸語と周辺言語（マリ語、タジク語）における補助動詞の分布]、2.2. で表 2: [モンゴル諸語および周辺言語（シベ語、ソロン語）における補助動詞の分布]、2.3. で表 3: [ツングース諸語と周辺言語（ユカギール語とニブフ語）における補助動詞の分布]、2.4. で表 4: [朝鮮語、日本語と周辺言語（中国語）における補助動詞の分布] の 4 つの表を示し、それぞれについて系統的・地理的分布の分析を行う。紙幅の関係上、いずれの表でも 1 言語のみに見られる補助動詞は示していない。（ ）に入れた形式は副動詞に後続していないものや、接辞化したものなど、本稿の補助動詞の定義に当てはまらないものである。いずれの表でもそれを使用している言語数の多いものから順に補助動詞を配列した（なお 1 つの Source に対していくつかの補助動詞がある場合も 1 つとしてカウントした）。表 1 と表 2 では紙幅の都合上、各言語における補助動詞の分布のみを示している。各言語における補助動詞の実際の形式⁶は付録 1、付録 2 として稿末に示し、そこには 1 言

⁴ 塩谷 (2006: 176-177) もこの接辞を -ž orxi- (orxi-「置いておく」) に遡るものとみている。

⁵ ここで Johanson (2002) のいう「アルタイ」とはチュルク、モンゴル、ツングースの 3 者に系統関係を認めた上でその全体を指しているものと思われる。

⁶ 形式における大文字の表記は母音調和による異形態のあることを示している。

語にのみ見られる補助動詞も示した。

2. 1. 補助動詞分布表のデータの出典と作成過程

まずデータの出典と表の作成過程を説明する。

大崎 (2017) の資料 1 ではチュルク諸語のうちキルギス、カザフ、タタール、ウズベク、(新) ウイグル、ハカス、サハ、チャガタイの 8 言語を横軸に取り、LIE DOWN, STAND, SIT DOWN, MOVE, GIVE, TAKE/RECEIVE, SEND, COME, LEAVE/RELEASE, GO, GET DOWN, PUT IN, THROW, GO OUT, PUT/KEEP, REMAIN/STAY, SEE, LOOK/WATCH, COME CLOSE, MISS/FAIL, BEGIN, BEND, PASS, BECOME, DO, KNOW, WRITE, PULL, HIT, LEARN, CAN, ENTER, FINISH を縦軸に取り、文法化した機能も考察しつつ補助動詞の使用の分布状況を整理している。

本稿ではこれに次の言語のデータを加えた。チュヴァシ語は風間・菱山 (2020)、トルコ語は Göksel and Kerslake (2005: 156-160)、トルクメン語は、Grunina (2005: 92, 157) と Shönig (2006: 266)、竹内・福盛 (2012: 164-165)、トゥバ語は高島 (2008: 186-189) からのデータである。歴史時代のウイグル語については Erdal (2004: 248-257) よりデータを加えた。トルクメン語に関しては 1988 年アジガバード生まれの話者にも状況を確認した。Masica (1976: 146-147) のデータから、タジク (印欧語族イラン語派) のデータを加えた。

2. 2. チュルク諸語と周辺言語 (マリ語、タジク語) における補助動詞の分布

表 1: チュルク諸語と周辺言語 (マリ語、タジク語) における補助動詞の分布

(なお下記における言語名の略号は以下の通り: (Ma)マリ; (Ch)チュヴァシ; (Tr)トルコ; (Tm)トルクメン; (Chgt)チャガタイ; (Krg)キルギス; (Tt)タタール; (Tj)タジク; (Uz)ウズベク; (N Uy)新ウイグル; (Uy)ウイグル; (Xk)ハカス; (Tv)トゥバ; (Sx)サハ)

	Ma	Ch	Tr	Tm	Chgt	Krg	Tt	Tj	Uz	N Uy	Uy	Xk	Tv	Sx	
GO	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
STAND	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	12
SIT DOWN	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	12
MOVE		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
COME	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
REMAIN, STAY	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	12
GIVE	○			○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	11
TAKE, RECEIVE	○			○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	11
SEE	○	○			○	○	○	○	○	○		○	○	○	11
LIE DOWN	○	○		○		○	○		○	○		○	○	○	10
LEAVE, RELEASE	○			○		○	○	○	○	○	○		○		9
THROW	○	○			○	○	○	○	○	○				○	9
SEND	○	○		○	○	○	○	○	○						8

GO OUT		○		○	○	○	○		○	○		○			8
BECOME				○	○	○			○	○	○		○		7
PUT, KEEP	○	○		○		○	○		○	○					7
GET DOWN					○	○	○			○		○		○	6
BEGIN				○	○		○		○			○		○	6
FINISH	○	○		○		○					○			○	6
PUT IN		○			○	○			○	○		○			6
KNOW				○	○		○		○			○			5
MISS FAIL					○		○		○					○	4
ENTER					○	○							○	○	4
LOOK, WATCH							○		○	○					3
PASS				○					○	○					3
HIT												○	○	○	3
FALL		○										○			3
COME CLOSE					○	○									2
DO										○					2
PULL												○		○	2

2.2.1. チュルク諸語の内部における補助動詞の使用状況

2.2.1.1. 言語別の状況

まずチュルク諸語内部では、トルコ語を除き、どの言語もさかんに補助動詞を使用していることがわかる。いったんトルコ語を別扱いにして、使用の多い順に並べると、キプチャク語群（タタール 22、キルギス 22）＞チャガタイ語群（ウズベク 22、新ウイグル 20）＞サハ 19＞ボルガル語群（チュヴァシュ 18）＞オグズ語群（トルクメン語 17）＞シベリア語群（ハカス 16、トゥバ 15）のようになっており、あまり差がなくどの語群もどの言語も多く補助動詞を使用していることがわかる。チャガタイ語やウイグル語など、歴史時代の言語にも類似の補助動詞の使用が確認できるので、ある程度昔から同じような補助動詞が使われてきたものと想像される。しかも（タタール語からの影響もあるだろうが）系統的に最も早く分岐したと考えられるチュヴァシュ語に、他の言語のそれと形式的にも機能的にも対応する一連の補助動詞がみられることから、チュルク諸語は祖語の段階からある程度の補助動詞を備えていたとみるべきではないだろうか。したがって「補助動詞が比較的最近に発達した」という Johanson (2002) の推定にはすぐには同意し難い。後からの発達であるとしてもそれはチュヴァシュ語の分岐以前の古い時代に遡るものと考ええる。

一方、トルコ語に補助動詞のないことは歴史的、機能的にはどのように説明されるべきだろうか。この点について以下に若干の考察を加える。チュルク諸語の中でもトルコ語では補助動詞が接辞化している。Göksel and Kerslake (2005) は、トルコ語の拘束補助動詞として、以下の例を挙げている。橋本 (2019) は、その補助動詞が表す中心的な意味を付して次のように示している。

-(y)Abil (可能) (<「知る」)、-(y)Iver (敏捷) (<「与える」)、-(y)Agel (習慣) (<「来る」)、-(y)Adur (継続) (<「止まる」)、-(y)Ayaz (未実現) (<古チュルク「間違いを犯す」)、-(y)Akal (継続) (<「残る」)

自由補助動詞については、Göksel and Kerslake (2005: 157) において、以下の例が挙げられている。しかしこれらは形動詞形等に後続するようで、本稿の対象とはならない。

ol-「なる」、et-「する」、gel-「来る」、dur-「止まる」、kal-「残る」、düş-「落ちる」、bulun-「見つかる」、eyle-「する」、buyur-「命令する」

さらに完全に接辞化した-Iyor (進行) (<yürü-「歩く」) がある。したがってトルコ語にはかつて補助動詞を用いていた痕跡があり、同じオグズ語群⁷のトルクメン語が現在も多くの補助動詞を使用しているので、トルコ語はペルシア語⁸およびアラビア語の影響を受け、歴史的に補助動詞を失ったものと考えられる。しかし補助動詞が示していたアスペクト的意味自体は上記のように接辞化した「拘束補助動詞」によって表現され、維持されているということになる。

なお Göksel and Kerslake (2005) をはじめとする記述文法をみる限り、トルコ語における語幹拡張の文法的派生接辞は態を示すものばかりで、アスペクトを示すものは(上記の補助動詞由来のもの以外には)存在しない。例えばトルクメン語のアスペクトを示す語幹拡張の文法的な派生接辞には frequentative の -(A)la etc.、detensive の -(I)mjIrA etc. があるのみである (Shönig (2006: 266))。

サハ語やシベリア語群の言語はモンゴル諸語やツングース諸語と、チャガタイ語群の言語はペルシア語やタジク語と接触してきたものと考えられ、モンゴル諸語やツングース諸語、ペルシア語は以下でみるように補助動詞をチュルク諸語ほどには使用しない言語であるが、サハ語やシベリア語群の言語およびチャガタイ語群の言語はかなりの補助動詞を保っている。逆にこれらの言語からモンゴル諸語やタジク語に影響を与えたものと考えられる。これらの言語における補助動詞の保持と、トルコ語における補助動詞の喪失の違いの背景には、接触言語同士の人口の違いや文化的な力関係の違いなど、言語外的な要因があるものと考えたい。

2.2.1.2. 補助動詞別の状況

上位6つの補助動詞はいずれも自動詞で、Anderson (2006) における位置図式 (positional schema) および移動図式 (motion schema) の動詞である。これらはもっぱらアスペクト的な機能で用いられている。特に STAND, SIT DOWN, LIE DOWN の3つの位置図式の動詞と移動図式の MOVE が本来の意味を若干残しつつ、継続・進行の意味に文法化して使われる点 (ジャクシルク (2014) 参照) は(特に中央アジアの)チュルク諸語の補助動詞に特徴的なことと言えるだろう。次いで GIVE が他利態「～してあげる」(benefactive/ object version)、

⁷ なおオグズ語群でトルコ語とトルクメン語の間に位置するアゼルバイジャン語には補助動詞がほとんどないという (青山 p.c.)。地理的・政治的理由からアゼルバイジャン語にはペルシア語からの影響がトルコ語よりもさらに強く及んでいるものと考えられる。

⁸ ペルシア語には接続法の動詞形を後ろに従えて、「～できる」「～したい」「～すべき」などの意味を加える助動詞のみが存在し (吉枝 (2011: 158-170))、本稿の定義に合うような補助動詞は存在しないようだ。

TAKE が自利態「(自分のために) ~する」(self-benefactive/subject version) で用いられるとともに、始動相などのアスペクトの機能でも用いられている。授受以外の他動詞は位置・移動・授受が 11 あった後の 12 位以下に現れてくる。開始 (BEGIN) や終了 (FINISH) など、文法化しなくとも本来の意味でアスペクトの補助動詞になるようなものは比較的下位に現れる。モンゴル語や日本語で上位に現れる SEE や PUT, KEEP など比較的下位に現れる。HIT, PULL など他動性の高い動詞がサハ語やハカス語にみられるが、これらはこの地域に特徴的なものなのかもしれない。

2.2.2. 補助動詞にみられるチュルク諸語と周辺言語との言語接触

マリ語では副動詞のうち、-биH, -eH, -эH の語尾をもつ形は、日本語の連用形ないしは「テ形」によく似た機能を持ち、継起的な動作や同時的な動作を表わすほか、補助動詞を後続させた構造を作るという (松村 (1992: 161))。Riese et al. (2017: 444-446) には実に 33 の補助動詞があがっている。マリ語の話者は近隣のチュヴァシュ人 (8 世紀以降)、タタール人 (13 世紀半ば以降) と古くから交わっており、シンタクスにおいてもチュヴァシュ語の影響が及んでいると主張されている (松村 (1992: 162))。上記のようにマリ語にはきわめて多様な補助動詞が発達しているが、ウラル語族の他の言語の多くは補助動詞を持たないようだ。小泉 (1994: 211-235) ではウラル諸語の副動詞について記述しているが、このうち補助 (的) 動詞と共に用いられると明記されている言語は、マリ語とネネツ語、ガナサン語のみである。フィンランド語⁹をはじめとするフィン諸語はそもそも SVO が基本語順であり、英語における助動詞のように不定詞を取る構造がわずかに見い出されるのみで、補助動詞的な構造や本稿で定義しているような補助動詞に相当するものは存在しないという (石井 p.c.)。したがってマリ語は上記のチュルク諸語との接触を通じて補助動詞を獲得したものと考えられる。

2.3. モンゴル諸語および周辺言語 (シベ語、ソロン語) における補助動詞の分布

表 2 のうち、まずハルハ・モンゴル語 (以下単に「モンゴル語」とする) のデータの出典については本節で後述する。他の言語については次のような出典からデータを得た。すなわち、ブリヤート語は Sanzheev et al. (1962a: 191-194) と Sanzheev et al. (1962b: 41-49)、ダグール語は恩和巴图 (1988: 397-403)、東郷語は布和 (1986: 177-180)、保安語は陳乃雄 (1987: 249-252)、土族語は清格尔泰 (1991a: 211-215)、東部裕固語は保朝魯・賈拉森 (1991: 236-239) である。元朝秘史のモンゴル語については小沢 (1993: 602) の索引に基づき、小沢 (1984: 114, 141, 167)、小沢 (1986: 57, 78, 101, 160, 168)、小沢 (1989: 44, 95, 113, 115, 152, 196) の記述を確認した。シベ語については李・仲 (1986: 95-98) および 久保・児倉・庄声 (2011: 40) を参照した。ソロン語については主に筆者調査によるが、1993 年伊敏ソム生まれの話者にも状況を確認した。

⁹ なおフィンランド語におけるアスペクトの主な表現手段は以下のものであるという。「~しようとする」は 'try'+A 不定詞 (吉田 (2019: 406))、「~し始める」は 'begin'+A 不定詞 (吉田 (2019: 10))、「~している」は olla 'be'+MA 不定詞内格形 (吉田 (2010: 101)) もしくは目的語が分格か対格であるかの違い (吉田 (2010: 174-175)) などによって示される。

表 2：モンゴル諸語および周辺言語（シベ語、ソロン語）における補助動詞の分布

（なお下記における言語名の略号は以下の通り：(Si)シベ；(SY)東部裕固；(Tu)土族；(Bao)保安；(Do)東郷；
(MS)元朝秘史；(M)（ハルハ・）モンゴル；(B)ブリヤート；(Da)ダグール；(S)ソロン）

	Si	SY	Tu	Bao	Do	MS	M	B	Da	S	
GO	○	○			○	○	○	○	○	○	8
GIVE		○	○	○		○	○	○	○	○	8
SIT DOWN		○	○		○	○	○	○		○	7
TAKE, RECEIVE		○	○		○	○	○	○		○	7
CAN	○		○	○			○	○	○	○	7
FINISH	○			○		○	○	○	○	○	7
CANNOT		○	○	○	○		○	○	○		7
COME	○	○			○		○	○	○		6
GO OUT		○	○			○	○	○	○		6
BECOME	○	○					○	○	○	○	6
PUT, KEEP			○			○	○		○		5
BEGIN	○						○	○	○	○	5
THROW		○		○		○	○	○			5
SEE		○					○	○	○		4
LEAVE, RELEASE		○				○		○	○		4
BE			○				○	○	○		4
FIND							○		○	○	3
REACH						○	○	○			3
ENTER		○					○	○			3
FAIL, MISS			○				○	○			3
LIE DOWN	○						○	○			3
STAND	○								○		2
TAKE OUT							○			○	2
KNOW							○	○			2
WIN							○	○			2
KILL			○		○						2

2.3.1. モンゴル諸語の内部における補助動詞の使用状況

2.3.1.1. 言語別の状況

北東寄りに位置する諸言語、すなわちモンゴル語では 26、ブリヤート語では 24、ダグール語では 16 の補助動詞を用いており、そのメンバーも多くが共通している。ただしダグール語については、調査が進めばその数がさらに増える可能性も考えられる。元朝秘史蒙古語と共通している補助動詞も多く、13 世紀の元朝秘史の時代にはすでに現在と同じような補助動詞が用いられていたものと考えられる。これに対しいわゆるシロンゴル・モンゴル諸語／河西回廊のモンゴル諸語では東部裕固語 (12)、土族語 (9)、東郷語 (8)、保安語 (6) となっており、使用している補助動詞の数が北東寄りに位置する上記の諸言語より少ない。なぜか土族語には存在しないが、語幹に補助動詞の後続するものが東郷語と保安語に 4 つ、東部裕固語に 3 つある (本稿の定義には合わないが、今回これらも補助動詞にカウントした)。補助動詞の使用の減少と語幹形式への接続は、ともに漢語からの影響が原因である¹⁰と考えられる。さらに補助動詞の数の少なさの違いはそのまま漢語からの影響の強さの違いを反映していると考えられる。東郷語には [目的副動詞形/語幹 *teiji-*・*kaiji-*] があるが、これらは形式自体が漢語の「起 *qi3*」と「开 *kai1*」に由来するものであるという (布和 (1986: 178-179))。したがってこれらの言語も遡ればより多くの補助動詞を持っていたと考えられるので、少なくとも北東のモンゴル諸語とシロンゴル・モンゴル諸語の分岐以前の段階からある程度の補助動詞が存在していたものとする。なお KILL は土族語と東郷語にのみ現れており、シロンゴル・モンゴル諸語に特徴的な補助動詞であるのかもしれない。

2.3.1.2. 補助動詞別の状況

興味深いことに、モンゴル諸語での補助動詞の分布は表 1 (チュルク諸語) と表 3 (ツングース諸語) の中間的な状況を示しているようにみえる。チュルク諸語とは異なり、開始 (BEGIN) や終了 (FINISH)、可能 (CAN) など、文法化しなくとも本来の意味のままでアスペクトの補助動詞になるようなものが上位に現れている。他利態 (GIVE) と自利態 (TAKE) が 2 位 3 位に入っているが、これらもその動詞が本来の意味でそのまま文法的に機能するタイプとみることができる。ただし TAKE には完了アスペクトの機能もある (さらに少なくとも内モンゴルのモンゴル語では GIVE にも完了アスペクトの機能がある (スチンガルラ (2020) による))。このように本来的な意味がそのままの補助動詞が多い点はツングース諸語における補助動詞の分布に似ている。一方でチュルク諸語で上位を占めた位置図式 (positional schema) および移動図式 (motion schema) の動詞も散在している。特に位置図式 (positional schema) の SIT DOWN, LIE DOWN の 2 つの位置図式の動詞が、いずれも本来の意味を強く残しつつ、継続・進行の意味を示すことはチュルク諸語の状況にやや似ている (ただし使用頻度はずっと下がるようだ)。現代のモンゴル語で BE の意味であり、圧倒的な頻度で継続・進行の補助動詞に文法化している *baj-* も元来は STAND であったことは (ダグール語では現在も STAND である)、チュルク諸語でもっとも文法化の進んだ継続・進行

¹⁰ 査読者より御指摘をいただいたが、シロンゴル・モンゴル諸語の記述は遅れており、その蓄積は十分ではない。今後記述が充実していけば、さらにいくつかの補助動詞の存在が指摘される可能性も考えられる。

の補助動詞が STAND であることと軌を一にしている。

このようにモンゴル諸語の補助動詞が[本来の意味そのままですでに文法的な意味を実現するタイプ]と、[単独では本来の意味でも使われるが、かなり異なった文法的意味を実現するタイプ]の2層からなることを確認するために、モンゴル語の補助動詞に関する記述を詳しくみってみることにする。

岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉¹¹では「よく使われる補助動詞」として、下記のような補助動詞を示している。機能的にはアスペクトの機能を示すことを示唆している。これらはその大部分が本来の意味そのままに文法的な意味を実現するタイプから構成されている。

-ž exel- 【V】しはじめる (自動詞・他動詞) / -ž gar- 【V】しだす / -ž duus- 【V】しおわる (自動詞) / -ž duusga- 【V】しおえる / -n jad- 【V】することができない、【V】しきれない / -ž ir- (+過去形) 【V】してきた / -x gež baj- 【V】するところだ / -x geed baj- 【V】しようとしている / -x šax- 【V】しそうになる、【V】しかける / -xaar zavd- 【V】しようとする / -xyg zavd- 【V】しようとする / -x bol- 【V】することになる / -xaar bol- 【V】することになる / -dag bol- 【V】するようになる (恒常・習慣)

その一方で、岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉は「補助動詞として使われる動詞の本来の語彙的な意味でその動作や状態の状況を示す一連の表現がある」として次のような「付帯状況を表わす」補助動詞をあげている。形式の後ろの日本語は補助動詞の本来の意味ではなく、この補助動詞によって実現される付帯状況のニュアンスである (岡田・向井 (2006) は各補助動詞の例文も示しているが、紙面の都合上省略した)。これらは単独では本来の意味を実現するが補助動詞としてはかなり異なった文法的意味を実現するタイプから構成されており、そのメンバーはチュルク諸語の補助動詞の表1で上位を占めていた動詞ばかりである。

-ž suu- 暮らす・生活する / -ž xevt- 寝そべる・横たわる / -ž xaragd- 目撃される / -ž tar- 頑張る / -ž ald-, -aad ald- トライする = 「～してみる」 / -ž üz-, -aad üz- 試す = 「～してみる」 / -ž ög-, -aad ög- 供与する = 「～してやる」 / -ž av-, -aad av- 取る・完全に～する = 「～しとる」 / -aad xaja- ゴミにする

想像をたくましくすれば、次のような歴史的変遷が考えられる。すなわち、モンゴル諸語は本来補助動詞を用いず、文法的な機能の動詞が副動詞形に後続するものがあつたとしてもそれは本来の意味がそのままですでに文法的な意味を実現するタイプのものだけであつた (これは下記で見るツングース諸語でみられる状況である)。その後チュルク諸語からの影響を受け、本来の意味を残しつつかなり異なった文法的意味を実現するタイプ (上記の「付帯状況」を示すタイプ) が成立した、とするものである。

次にモンゴル語におけるアスペクトの語幹拡張接辞についてみる。Kullmann and Tserenpil (1996: 131-136) によれば、モンゴル語には -sxij- (quick action), -zAnA- (temporary action),

¹¹ 岡田・向井 (2006) の出典については、ステップ名を〈 〉内に示した。岡田・向井 (2006) 〈可能・不可能の表現〉ではさらに可能・不可能に補助動詞による3種類の表現があるとしている：自分の能力など一般的な場合：【語幹-ž】 čad-；状況が許すかどうかによる場合：【語幹-ž】 bol-；時間的に完遂できるかどうかによる場合：【語幹-ž】 amž-。

-čix- (completed action), -cgAA (collective action), -l (repeated action) の5つのアスペクトを示す生産的な語幹拡張の文法的派生接辞がある。ただしこのうちの -čix- は補助動詞 -ž orxi- の接辞化したものであり、-cgAA (collective action) は主語の複数性を示すものでアスペクトとはみなさないとする研究もある。もっとも頻度の高い進行形 -ž baj(-na)「～てい(る)」も、口語では -žijna のように接辞化した形で用いられる点にも注目したい。

いずれにせよ、モンゴル語にはアスペクトを示す統合的な表現、すなわちアスペクトを示す語幹拡張接辞がある程度存在することがわかる。

2.3.2. 補助動詞にみられるモンゴル諸語と周辺言語との言語接触

モンゴル諸語の周辺言語としてここでとりあげたのは共にツングース諸語に属するシベ語とソロン語である。シベ語はかつて長らくモンゴル系の言語、特にダグール語との接触があり、近年はさらにチュルク系の言語とも接触している。ソロン語は現在に至るまで一貫してモンゴル語およびダグール語と接触してきている。

次節にみるようにツングース諸語は本来補助動詞をほとんど使用していなかったと考えられるため、両言語ともモンゴル系の言語からの影響を受けて補助動詞を発達させてきたとみることができる。表2を見る限りでは両言語ともどちらかと言えばモンゴル語よりもダグール語における補助動詞の分布に似た状況を示している。

シベ語に関して、久保・児倉・庄声 (2011: 40) は以下の補助動詞を挙げている。

-me waje-「～し終わる」、-me aci- [maci-]「～しだす」、-me dyuriwe-「～し始める (話者の想定内か、支配下で)」、-me mutu-「～できる (能力可能、状況可能)」、-me baχene-「～できる (技術的可能)」、-me omi.[-momi]「～してよい」、-me oju=qu「～してはだめ¹²」

これらはその多くが本来の意味がそのままですでに文法的な意味を実現するタイプのものである。他方、少なくともソロン語ではアスペクトの語幹拡張接辞が衰退してきたことを指摘することができる。すなわち系統的に最も近いエウエンキー語では10のアスペクト接辞が記述されているのに対し (Bulatova and Grenoble (1999: 29-33))、現在のソロン語で生産的なアスペクト接辞は3つほど (進行相、反復・反動相、状態相) である (筆者調査による)。

2.4. ツングース諸語と周辺言語 (ユカギール語とニブフ語) における補助動詞の分布

表3にはエウエン語 (I群)、ソロン語 (I群)、ウデヘ語 (II群)、ナーナイ語 (III群) のデータを示した (I~IV群の分類に関しては Ikegami (1979) および風間 (1996) を参照、データは基本的に筆者の現地資料に基づく (風間 (2010a: 240-241), (2010b: 254-255) を参照されたい))。さらに近隣の言語として、ユカギール語 (系統的に孤立)、ニブフ語 (系統的に孤立) のデータを加えた。なおウデヘ語とナーナイ語の同時副動詞形の接辞は -mi である。

¹² なお oju=qu は「なる」という動詞の否定形である。

表 3：ツングース諸語と周辺言語（ユカギール語とニブフ語）における補助動詞の分布

（なお下記における言語名の略号は以下の通り：(Niv)ニブフ；(Na)ナーナイ；(U)ウデヘ。1 言語のみに見られる補助動詞は表の下に示した（表 4 も同じ）。）

	ニブフ	ナーナイ (III 群)	ウデヘ (II 群)	エウエン (I 群)	ユカギール	
FINISH	tvi-	-mi xoji-	-mi wadi-			3
KNOW			-mi saa-	CVB.PURP saa-		2
CAN		-mi otoli-, -mi mutə-	-mi mutə-, -mi nyoni-			2
BE	hum-				CVB.PURP l'e-	2

LOOK, WATCH (Niv) nyu-, MISS FAIL (Na) -mi čila-, BEGIN (Na) -mi dəruu-, -mi təpčiu-, DO (U) -kcA-mi nixə-, FIT (Na) -mi ača-, DO SO (Niv) ha-, DO OFTEN (Niv) k'evara-, FIGHT (Niv) uumu-, UNDERSTAND (U) -mi əgzə-, HAVE TIME TO DO (Na) -mi korpi-

2.4.1. 言語別の状況・補助動詞別の状況

表 3 からわかるように、ツングース諸語に補助動詞はほとんど存在せず、あったとしてもそれは独立して使われた場合の動詞本来の意味をただそのまま実現しているもののみである（KNOW は能力可能に用いられている）。文法化した機能を示しているといっても、それは他言語における状況を基準とした通言語的な観点からのものであり、ツングース諸語自体において表 3 の補助動詞が例えばアスペクトのような文法カテゴリーの体系をなしているわけではない。したがって一言でいえばツングース諸語に補助動詞はない、ということになる。ナーナイ語およびウデヘ語という、より南に位置する言語にのみある FINISH や CAN も、モンゴル語からの影響によって生じた可能性が考えられる。

一方、アスペクトの統合的な表現がどのような状況であるかについてみよう。

エウエン語においてアスペクトを示す語幹拡張の文法的派生接辞はきわめて豊富である：継続体「～している」：-j/-č/-jI/-čI/-jId/-čId/-jIj/-čIj etc.／一回体「一回～する」：-n／多回体「何度も／続けて～している」：-t/-č/-čI／始動体「～し始める」：-l／習慣体「いつも～する」：-wAAAt/-wAAč etc.／反復体「かつては～していたものだ」：-grAA/-gArAA/-kArAA/-ŋArAA etc.／長時間継続体「ずうっと～する」：-jAAAn／希少体「たまに～する」：-wAn／速攻体「すばやく～する」：-mAlči／瞬間体「ちょっと～する」-sAn/-sn/-s。

ウデヘ語のアスペクトには次のような接辞が揃っている：反復・反動 -gi-、始動 -li-、分配 -ktA-、多回・継続 -si-、軽度 -ndA-、継続・多方向 -wAsi- ～ -mAsi-、無意志始動 -mulA-、-lAA-。

ナーナイ語のアスペクトにも次のような接辞が揃っている：反復・反動 -gO-、始動[1] -lO-、始動[2] -psm-、分配 -ktA-、多回・継続 -(A)či-、継続 -si-、多回 -nAsi-、習慣 -lsi-。

2.4.2. ツングース諸語周辺に位置するアルタイ型言語における補助動詞

ユカギール語にはエウエン語から、ニブフ語にはウルチャ語からの影響が及んだと考えられるが、そもそも上記のようにツングース諸語には補助動詞がほぼ存在しないので影響によって増えるという可能性はない。ただユカギール語もニブフ語も主要部後置型の語順

(SOV・AN 語順) のアルタイ型言語である。アルタイ型の言語類型と補助動詞の存在の間には何か関係があるのだろうか、もしくは東北アジアの地域と補助動詞の間に何か関係があるのだろうか。むしろこの 2 点を解明するために両言語における補助動詞の使用状況を知ることが重要である。

ユカギール語で唯一補助動詞と考えて問題がないのは目的副動詞に後続する l'e-「いる」であるが、意味は日本語の「～て いる」などとは異なり、将然 (prospective) アスペクト「～しそうだ、～するつもりだ」を表わすという (長崎 (2008: 82-83), Maslova (2003: 178))。その他、目的副動詞と用いられ、モーダルあるいはアスペクト的な意味を表すものに、nadoŋō-「必要だ」、lorqaj-「できない」、lejdi-「できる、知っている」、erd'i-「欲する」、kit'ie-「できるようになる、覚える」、kudele-~kudel'e-「準備する」があるが、これらは補助動詞というよりは、補部節をとる動詞と見なされるという (長崎 p.c.)。しかもこのうちの多くはロシア語の影響で成立したものと考えられる (長崎 (2021))。他方、ユカギール語には -j [使役]、-rii, -re [適用]、-de etc. [自動詞化] のようなヴォイス、-nu/-nnu [不完了]、-ej/-aj [完了]、-ie/-aa [起動]、-nun/-nunnu [習慣]、-t'ii [少し～する] のようなアスペクト、-ool' [願望] のようなモダリティの機能を持つと考えられる語幹拡張の文法的な派生接辞が揃っている (長崎 (2008: 110-144))。従ってユカギール語はツングース諸語同様、もっぱら語幹拡張接辞でアスペクトを示し、補助動詞は用いない言語であることがわかる。

ニブフ語において Mattisen (2003: 18) は次のようなものを一般副動詞 (-t/-r) に後続する補助動詞として挙げている。

humɖ “sth. is there” > continuative/progressive/resultative / haɖ “it is so” > habitual / tviɖ “s.o. completes, stops” > “finish V-ing / k'evarəɖ “s.o. often does” frequentative / ñuɖ “s.o. examines sth. by sight” > conative / ūmuɖ “s.o. fights” > “strive for”

アスペクトは上記の補助動詞による他に、接辞 (-inə ~ -jnə [起動]、-kar [完結]、-ivu ~ -jvu [現在進行]、-xsu [否定の慣習]、-xə [恒常]、-rəm / -təm [過去の進行や過去の結果状態]) や重複 (反復・多回) によっても表されるという (蔡 (2020: 90-97))。したがってニブフ語では語幹拡張接辞と共に若干の補助動詞によってアスペクトを表現していることがわかる。ただしその補助動詞はアルタイ諸言語のどのグループの補助動詞とも類似していない。

2.5. 朝鮮語、日本語と周辺言語 (中国語) における補助動詞の分布

表 4 は朝鮮語と日本語 (および日本語古文) のデータ (出典は下記) に中国語の情報を加えて作成した。中国語に関しては、愛知大学中日大辞典編纂処編 (1996) にアスペクトや他利態など文法化した機能の用法が記載されているものをできる限り取り上げた。

表 4：朝鮮語、日本語と周辺言語（中国語）における補助動詞の分布

（なお下記における言語名の略号は以下の通り：(K)朝鮮語；(J)日本語；(OJ)日本語古文；(Ch)中国語）

	朝鮮	日本	日本語古文	中国語	
COME	-A o-	-te k-	k-	(lai2)	3
GO	-A ka-	-te ik-	ik-	(qu4)	3
SEE	-A po-, -ko po-ni, -ko po-myen, -ta(ka) po-ni, -ta(ka) po-myen	-te mi-	mi-	(kan4)	3
PUT, KEEP	-A twu-	-te ok-	ok-		3
GIVE	-A cwu-	-te age-, -te kure-		(gei3)	2
BE	-A iss-, -ko iss-	-te i-, -te ar-		(zai4)	2
SIT DOWN	-ko anc-		wor-, wi-		2

GO OUT (K) -A naka-, -ko na-, (Ch) (chu1), BEGIN (J) (#hajime-), (OJ) som-, hajim-, TAKE OUT (K) -A nay-, (J) (#das-), FIT (J) (#aw-), (OJ) ap-, CONTINUE (J) (#tuduke-), (OJ) tuduk-, LIE DOWN (K) -ko cappaci-, STAND (OJ) tat-, MOVE (OJ) aruk-, TAKE, RECEIVE (Ch) (de2, dei3), LEAVE, RELEASE (K)-A noh-, GET DOWN (Ch) (xia4), THROW (K) -A peli-, -A chiwu-, LOOK, WATCH (J) -te mise-, PASS (OJ) watar-, topor-, BECOME (Ch) (cheng2), KNOW (OJ) sir-, WEAR (Ch) (zhe<zhuo2), REACH (Ch) (dao4), TAKE RECEIVE (J) -te moraw-, WIN (OJ) masar-, OPEN (Ch) (kai1), DIE ((si3), NEED (Ch) (yao4), HOLD (K) -ko kaciko, CUT (J) {#kir-}, HANG (J) {#kake-}, GET (OJ) u-

朝鮮語と日本語が用いている補助動詞は広い視野から考えればかなり似ているとみることができる。中国語にも Source・Target の両面でよく似た文法要素が存在しているので、中国語からの影響があった可能性も考えられる。チュルク諸語やモンゴル諸語の補助動詞に比べると、補助動詞の種類自体はかなり限られている。まず Source となっている動詞はどちらかと言えばモンゴル諸語のメンバーに似ていて、自動詞にも他動詞にも偏ることなく、位置図式にも移動図式にも偏ることなく、多様な動詞に亘っている。モンゴル諸語とは異なり、CAN や CANNOT を Source とするものはない。Target の機能もアスペクトが中心的ではあるが、他利態や試行も高い頻度で用いられる。

以下ではまず朝鮮語の補助動詞に関する記述を確認する。Kwuklipkwukeyenkwuwen (1999) に補助動詞としてあげられているのは以下の動詞である（日本語訳は蔡熙鏡氏による）。

- ・cappacita 「倒れる、転がる」 > -ko cappacita 「issta 「ある／いる」を俗にいうことば」
- ・ancta 「座る」 > -ko ancta 「issta 「ある／いる」を皮肉っていうことば」
- ・cwuta 「あげる」 > -a/-e cwuta 「前の動詞の行為が他人の行為に影響を及ぼすことを表すことば」
- ・ota 「来る」 > -a/-e ota 「前のことばの意味する行動・状態が話し手、または話し手が定めた基準点に近づきながら続けて進行することを表すことば」
- ・kata 「行く」 > -a/-e kata 「話し手、または話し手が定めるある基準点から離れながら、前の言葉の意味する行動・状態が続けて進行することを表すことば」
- ・pelita 「捨てる」 > -a/-e pelita 「前のことばが表す行動がすでに終わっていることを表すことば」

- ・ *chiwuta* 「どける、どかす、片付ける」 > *-a/-e chiwuta* 「前のことばが表す行動を容易く、速くやっ
てしまうことを表すことば」
- ・ *nakata* 「出て行く」 > *-a/-e nakata* 「前のことばが意味する行動を続けて進行することを表すことば」
- ・ *nata* 「出る」 > *-ko nata* 「前のことばが意味する行動を終わらせて、成し遂げたことを表すことば」
- ・ *nayta* 「出す」 > *-a/-e nayta* 「前のことばの意味する行動が自らの力で成し遂げられることを表すこ
とば。主にその行動が難しい過程であることを表すときに使う。」
- ・ *nohta* 「置く、放す、中止する」 > *-a/-e nohta* 「前のことばの意味する行動を終わらせて、その結果
を維持することを表すことば」「形容詞または ‘ita’ の後で、前のことばの意味する状態が持続してい
ることを強調する言葉。主に後ろのことばの内容に関する理由や原因を表すときに用いられる。」
- ・ *twuta* 「置く、しまう、設置する」 > *-a/-e twuta* 「前のことばの意味する行動を終わらせて、その結
果を維持することを表すことば。主にその行動が他のことへの備えであることを表すときに使う。」
- ・ *pota* 「見る」 > *-a/-e pota* 「ある行動を試しにやることを表すことば。あることを経験することを表
すことば」
- ・ *-ko poni, -ko pomyen* 「前のことばが表す行動をやった後に、後ろのことばが意味する事実を新たに分
かったり、後ろのことばが意味する状態になることを表すことば。」
- ・ *-ta(ka) poni, -ta(ka) pomyen* 「前のことばが表す行動を行う過程で、後ろのことばが意味する事実を新
たに分かったり、後ろのことばが意味する状態になることを表すことば。」
- ・ *tulta* 「入る」 > *-lye(ko) tulta, -kilo tulta, -cako tulta* 「前のことばが意味する行動を積極的にやろうと
することを表すことば」
- ・ *-ko tulta* 「前のことばが意味する行動を荒く、責め立てるようにすることを表すことば」
- ・ *issta* 「ある、いる」 > *-a/-e issta* 「前のことばが意味する行動や変化が終わった状態で持続している
ことを表すことば」
- ・ *-ko issta* 「前のことばが意味する行動が続いている、またはその行動の結果が持続していることを表
すことば」
- ・ *kacita* 「持つ」 > *-a/-e kaciko* 「前のことばが意味する行動の結果や状態がそのまま維持されたり、そ
れによって後ろのことばの行動や状態が誘発または可能になることを表すことば」

朝鮮語には *-ass/-ess-*, *-assess/-essess-*, *-kyess-*, *-te-* と 4 つの語幹拡張の文法的派生接辞があるが、これらは時制とアスペクトとモダリティにまたがった機能を実現している(李・李・蔡 (2004: 176-182))。 *po-* 「見る」が副動詞形や後続する形式によって多様な機能を実現している点が特徴的である。補助動詞構造のうちいくつかのものが、さらに副動詞形を取った形で固定している点も特徴的である。

次に日本語に関する補助動詞の記述を確認する。日本語記述文法研究会 (編) (2010: 98-99) は次のように記述している：

動詞のテ形に、もう 1 つの動詞が補助動詞として連なることがある。次のようなものが、補助動詞として用いられる。

- 1) アスペクトに関する補助動詞：(して) いる. (して) ある. (して) おく. (して) くる
- 2) 移動の方向に関する補助動詞：(して) いく. (して) くる
- 3) 恩恵的事態表示に関する補助動詞：(して) あげる. (して) くれる. (して) もらう

4) 行為結果に対する態度に関係する補助動詞：(して) みる、(して) みせる

補助動詞として用いられる動詞には、単独で用いられる本動詞としての用法もある。

交番で道を教えてもらった。(補助動詞)

友達にお菓子をもらった。(本動詞)

複合動詞の後項となる動詞に関しては、日本語記述文法研究会（編）（2010: 43）は次のように記述している：

複合動詞がアスペクトを表わすものには、「しかける」「しはじめる」「しだす」「しつづける」「しおわる」などがある。

その他に相互のヴォイスを示す「～しあう」やアスペクトを示す「～しきる」などがある。

日本語にアスペクトを示す語幹拡張の文法的派生接辞はない（風間（1992））。

より古い時代の日本語の補助動詞に関して、青木（2013: 225-226）は次のように述べている（太字・下線は筆者による）。

後部要素の補助動詞が発達することで生産的に「複合動詞」が作られるようになった、という変化が期待されるが、「補助動詞的なもの」は上代から存しており、その内実はさほど変わっていない。徳本（2009）に挙げられる例は、以下のとおりである。

不可能：あふ、得、かつ、かぬ、知る／時間：初む、始む、渡る、続く、をり、ゐる、います、終ふ、はつ、尽くす、来、行く／継ぐ、返る、返す、ます、まさる／空間：渡る、渡す、通る、歩く／程度：飽く、余る、頻く、しきる、足る、たつ／相互：合ふ、かはす、かふ／意図：みる、おく／

関（1977: 110-113）に挙げられる、中古の『源氏物語』の「補助動詞的」「接尾語的」な例は、以下のとおりである。

完了・継続：果つ、わたる、居る、おはします、成る、及ぶ／移動：ありく、寄る、行く、来、参る、馴る、通ふ、入る、のがる、...／状態：合ふ、わぶ、騒ぐ、ののしる、すさぶ、たはぶる、困ず、...／現出：出づ

現代語のもの（統語的：始動、継続、完了、未遂、習慣、相互行為、可能など。語彙的：完了、開始、継続、習慣、強調、相互関係、不成立など）と比べても、表される意味概念はほとんど変わっておらず、語彙的な出入りがあるにすぎないといえる。

「未発達→発達」といった具体的な事実は観察されないとすると、目に見える変化として最も大きな部分は、(6) で挙げたような「動詞連続」を、「テ」などを明示して動詞連続として表すようになった点ではないかと考えられる（「急ぎ行く」→「急いで行く」、「惜しみ思ふ」→「惜しいと思う」）。

なお「テ形補助動詞の発達」は、いずれも中世鎌倉・室町時代以降に起こっている」という（青木（2013: 237））。

3. 分析結果のまとめ

3.1. 言語接触の観点からの分析

現時点での暫定的な整理ではあるが、地理的分布も考慮しつつ、本稿で扱った言語の補助動詞の数¹³を表に整理してみると以下ようになった。なお（ ）内は本稿の直接の対象ではない別系統の言語、斜字体はアルタイ型だがやはり直接の対象ではない言語を示す。

表 5：対象諸言語の地理的分布と補助動詞の数

(フィン 0)	マリ 21			サハ 19	ユカギール 1	エウェン 1
	チュヴァシュ 18	タタール 22	ハカス 16	バリヤート 24	タグール 16	ナナイ 5
	カザフ 15	シベ 11	トゥバ 15	モンゴル 26	ソロン 12	ウデヘ 4
		キルギス 22	シロソコル 6/8/9/14	(中国 17)	満洲 ?	ニブフ 6
トルコ 0	トルクメン 17	ウズベク 22	新ウイグル 20	(チベット 0)	朝鮮 14	日本 7
		(タジク 10)	(パルミア 0)	(ビルマ 9)		
				(ヒンディ 10)	(ベンガル 8)	

ウラル語族におけるマリ語や印欧語族イラン語派のタジク語、ツングース諸語のソロン語などの状況をみると、同じ語族内でも、ある言語だけが接触によって多くの補助動詞を発達させることがある、ということがわかる。一方トルコ語をみると、同じ語族内でも、ある言語だけが補助動詞を全く衰退させてしまうこともあることがわかる。シロソコル・モンゴル諸語でも漢語の影響による補助動詞の衰退が観察された。基本的に補助動詞の分布は、言語接触によってかなり容易に変わり得るものであると考えたい。

より大きな視点に立つと、チュルク諸語の大部分とモンゴル諸語の大部分は下記のような点である程度共通した特徴を持っていると考える。①他利態の GIVE と自利態の TAKE がペアをなしている。②GIVE が受益表現を示すと同時に、アスペクトをも示し得る（ただしチュルク諸語のそれが主に継続の意味であるのに対し、モンゴル諸語のそれは主に完了である）。③歴史的な来源として考えれば、両語群とももともと使用されている継続・進行の動詞は STAND である。④同じ補助動詞に対して、同時副動詞形と継起副動詞形の両方によるものがいくつも存在する。したがって両語群は相互に影響を与えつつ補助動詞を維持しかつ発達させてきたものと考ええる。

次に Masica (1976) が示した「アルタイ諸言語を中心とする地域とインドが補助動詞に関して連続した言語地域をなす」という仮説について検討する。

まず補助動詞自体についてみると、Masica (1976) が示すインド言語領域の補助動詞は、一部アルタイ諸言語のものと重なりを見せるものの、SIT, LEAVE/RELEASE を除くとほとんどが motion schema のもので、他の一部の action schema のものも方向性を持つものばかり

¹³ カザフ語の補助動詞の数は大崎 (2017) を参照した。ビルマ語、ヒンディー語、ベンガル語のそれは Masica (1976: 147) による。このうちビルマ語では動詞連続と補助動詞の境界が明らかではなく、本稿の定義に合う補助動詞であるのかも問題である。安田 (2006: 72-74) によれば、単独用法を持つ助動詞は 42 ある。

である。インドに特徴的な RISE, FALL がアルタイ諸言語にはほぼない。SIT ‘regret; stubbornness’ や LEAVE/RELEASE ‘completion + ?’ という Target の機能も、チュルク諸語などのもの (SIT ‘progressive’, LEAVE ‘incidental’) とは全く異なっている。

他方、LEAVE/RELEASE ‘completion + ?’ はモンゴル諸語や朝鮮語と共通している。GIVE ‘away from subject + “benefactive” ’ と TAKE ‘toward subject: “reflexive” ’ がセットになっている点はチュルク諸語・モンゴル諸語と似ている。

次に、インドと中央アジアを繋ぐ地理的な位置にある言語 (ペルシア語とチベット語) に補助動詞が観察されない点も問題である。ペルシア語に補助動詞的要素のないことはすでにみた (註 6)。海老原 (2019: 170-174) によれば、アムド・チベット語には動詞連続の後項となる動詞に KNOW, MAY, CAN, NEED, FIT, EXPERIENCE, BE, COME, STAY, PUT, FINISH の Source を持ちアスペクトなどの Target の文法的機能を実現するものがある (英語への訳は筆者による)。そのメンバーと機能は若干モンゴル語の補助動詞には似ているものの、インドの諸言語の補助動詞とは全く異なっている。

現時点で結論を下すのはなお時期尚早であるかもしれないが、上記のような状況をみる限りでは、補助動詞の分布がインドからアルタイ諸言語を経由して日本へと連続する地域特徴であるとは考えにくく、別個に発達したものとみるのが妥当ではないかと考える。

3. 2. 語族間での対照言語学的な観点からの分析

3. 2. 1. 補助動詞の Source と機能

3.1. でまとめたような言語接触による変容を取り除いて考えると、中央アジアのチュルク諸語や北東部のモンゴル諸語、日本語など、言語接触の少ない地域では同じような補助動詞がある程度以上の長い時間にわたって保持されてきたことも確認できた。したがって各語族にはその語族における補助動詞の分布にそれぞれの特徴がある。

チュルク諸語では位置図式と移動図式を Source とし、アスペクトを Target とする補助動詞が多く、本来の意味の傾向をわずかに残しつつかなり異なった文法的意味を実現するタイプの補助動詞が多くみられた。他方、アスペクトを示す語幹拡張の文法的派生接辞はほとんどなく、補助動詞と語幹拡張の派生接辞は相補的にアスペクト表示の機能を分担している。

これに対しツングース諸語には補助動詞がほとんどない。わずかにみとめられるものは、BEGIN, CAN, KNOW など本来の意味そのままに文法的に機能するタイプである。他方、アスペクトを示す語幹拡張の文法的派生接辞が多く存在し、ここでもアスペクト表示機能に関して補助動詞と語幹拡張の派生接辞は相補的である。

モンゴル諸語は上記両語族の中間的な特徴を示し、本来の意味そのままに機能するタイプの補助動詞に、独立語での意味とはかなり異なった文法的意味を実現するタイプの補助動詞が被さったような補助動詞の分布を示している。

朝鮮語と日本語はアスペクトを示す接辞をほとんどもしくは全く持たないにも関わらず、補助動詞もさほど多くない。これは補助動詞と語幹拡張接辞以外にも複合動詞をはじめさらに多種多様なアスペクト表示形式を持っているためではないかと考える。ただしこの点に関してはなお今後の検討を要する。

3.2.2. 補助動詞に先行する副動詞形に関する相違

まず日本語とツングース諸語では **Source** を同じくする動詞が異なる副動詞形の動詞に後続して補助動詞としての機能を示す、ということがない。言い換えれば、先行する副動詞形は常に同じであり、日本語ではテ形、ツングース諸語では同時副動詞形である（歴史的には、わずかに西日本におけるシヨルとシトルの違いが認められる）。

朝鮮語には同時的な副動詞形の接辞（-ko）と継起的な副動詞形の接辞（-A）があるが、補助動詞によってどちらの副動詞形接辞をとるかは基本的に決まっているようだ。ただ **po-**「見る」のみは、どちらの副動詞形にも後続し、さらに補助動詞自身がとる語尾によっても異なった意味を実現する。

これらに対し、チュルク諸語とモンゴル諸語での状況はさらに異なり、往々にして **Source** を同じくする動詞が異なる副動詞形の動詞に後続する。

しかし両者にはさらに違いがある。モンゴル諸語の補助動詞は、同時副動詞形に後続しても、継起副動詞形に後続しても基本的に同じ機能を示す（**baj-**「いる、ある」を除く）。スチンガルラ（2020）は内モンゴル中部方言における授受補助動詞の **ab-**¹⁴「取る、もらう」、**ög-**「あげる、くれる」、**ali-**「もらう」と移動を表す補助動詞の **oru-**「入る」、**γar-**「出る」、**ire-**「来る」、**yabu-**「行く、移動する」、**oči-**「行く、行き着く」、**od-**「行く、赴く」を取り上げ、先行する副動詞形の違いにも注意しつつその意味機能を分析している（動詞の形式の表示はスチンガルラ（2020）に拠っている）。これを見る限りでは、ごく一部の補助動詞を除き¹⁵、副動詞形によらず補助動詞の示す機能は同じである。

これに対しチュルク諸語では言語によって、また補助動詞によって状況は異なり、継起副動詞形のみを取る補助動詞が多いものの、同時副動詞形と継起副動詞形の両方を取る補助動詞が多く存在する。中でも例えば **GIVE** の補助動詞では同時副動詞形に後続した場合には継続アスペクト、継起副動詞形に後続した場合には他利態、のように副動詞形によってかなり異なった意味を実現するものもある。他方で、アスペクト内部での微妙な意味の違いを実現しているものもある（**STAND** など）。

このように語族／言語によって補助動詞による副動詞形の取り方はさまざまに異なっているが、その理由や他の類型特徴などとの関連についてはまだ何もわかっていないものと考えられる。

3.3. 類型論的観点からの分析

3.3.1. アルタイ型言語における補助動詞の位置づけ

ここではまず類型論的なタイプと補助動詞の関係について考える。典型的な膠着型言語であれば、一形態素が一つの機能を持ち、語彙的意味は語幹もしくは語で、文法的意味は接辞もしくは付属語で表されることになるだろう。なおアルタイ型言語（**SOV** 接尾辞型言語）が拡散型（一形態素一機能型）になる理由については風間（2020: 25-26）で述べた。

¹⁴ 内モンゴル中部方言の語形をモンゴル文字から翻字したものであるため、上記のキリル文字からの翻字によるハルハ・モンゴル語の語形とは異なることに注意されたい。

¹⁵ 補助動詞 **γar-** に関しては継起副動詞形に後続した場合、主に行為の完遂・変化の達成を示し、補助動詞 **oru-** に関しては全て継起副動詞形に後続している、としている。

したがって、アルタイ型の言語であれば、アスペクトのような文法的意味は接辞として現れる方がその類型的な性格に合っていると考えられる。実際に頻度の高いアスペクト形式は、日本語で *-te iru* > *-teru*, *-te simau* > *-tjau* のように縮約し接辞化するし、モンゴル語でも *-ž bajna* > *-žijna* 「～している」、*-ž orxi-* > *-čix-* 「～してしまう」のように共時的もしくは通時的な接辞化が観察される。2.2.1.1.節でみたようにトルコ語でも接辞化が起きた。ツングース諸語のアスペクト形式はもっぱら接辞によるものであった。ユカギール語やニブフ語のような系統的に孤立したアルタイ型の言語でもアスペクトは接辞による表示が一般的であった。一方、孤立型の言語の動詞連続などでは、いくつかの動詞が本来の意味を保持しつつ、その一方で文法化してアスペクトの表示を担うのが一般的である。したがってアルタイ型言語におけるアスペクト表示はむしろ接尾辞による方がデフォルトであると考ええる。本稿の対象言語のうちの多くに補助動詞が豊かにみられることは類型的な理由によるのではなく、地域特徴であると考ええる。

3.3.2. アルタイ型言語の動詞複合体におけるアスペクトの位置づけ

ではなぜアスペクトという文法的機能の体系は、補助動詞で表されることが多いのだろうか？ これはアスペクトという文法範疇の示す意味にその原因があると考ええる。Bybee (1985) は動詞語幹に意味的な関連性が高い形態素ほど語幹に近い位置に現れるとし、次のような形態素の順序が一般的であるとしている：

V-結合価-態-アスペクト-時制-モダリティ- (数・人称・性などの) 一致

このうち態はアルタイ諸言語と日本語においてやはり語幹に最も近い位置に現れ、どの言語でも語幹拡張の文法的派生接辞である（ただし、日本語では結合価と態は異なる要素であるが、アルタイ諸言語では両者は連続している）。朝鮮語の態には分析的なものもあるが（*-gei hada*, *-ejida* など）、結合価と態が未分化な形式（いわゆる *-i/-hi/-ri/-ki* etc.）はやはり語幹に最も近い位置の語幹拡張の文法的派生接辞として現れる。一方、時制やモダリティはどの言語でも語末の屈折接辞として現れる（チュルク諸語とツングース諸語ではさらに人称・数の一致が屈折接辞として現れる）。すなわち、この両者（[結合価／態] と [時制・モダリティ]）の位置はきわめて安定している。[結合価／態] が動詞語幹の意味に最も深い関係を持つことは十分に肯けることであり、他方、[時制・モダリティ] はおよそ全ての動詞に関わってくる問題であるので、屈折接辞の位置にその場所を与えられるものと考えられる。

しかるに、この両者に対しアスペクトはその中間にあって、その生産性やスコープの広さに関しても中途半端な位置にある。アスペクトが補助動詞で示されたり、接辞で示されたりする原因の一つはこの不安定な位置にあると考ええる。時間というものは眼に見えない抽象的なものであり、名詞的な時間表現は「前」「後」「先」「中」など一般に位置や方向性を示す空間表現からのメタファーによって示される。したがって動詞の側でも位置や方向性を持つ動詞からのメタファーによって示されるのは自然なことではないだろうか。アスペクトの補助動詞に位置図式や移動図式のものが多いことはこのように説明できる。

3.3.3. 補助動詞はモダリティを示すのか

補助動詞が示すのはもっぱらアスペクトだけなのか？ という問題点についても考察を加えておく。先行研究には補助動詞の機能としてアスペクトの他にモダリティをあげるものが少なくない。1.2. 節でみた Masica (1976) がそうであるし、清格尔泰 (1991b) や Chuluu (1998) はモンゴル語（ここでは内モンゴルの諸方言を含む）の一部の補助動詞の機能をモダリティであるとしている。しかし清格尔泰 (1991b) や Chuluu (1998) がモダリティの機能を示すとする補助動詞は *čad-*「できる」、*jad-*「できない」、*med-*「知る」などであり、これは欧米のモダリティの諸研究が伝統的に可能の意味を *dynamic modality* としているのに倣って、単に意味の点からモダリティを示すと判断したに過ぎないものと考えられる。アルタイ型言語において「可能」をモダリティとすることが、このタイプの言語の実態に合っているのかについて筆者は疑問を持っているが、このことについては稿を改めて論じることにする。一方、Masica (1976) がモダリティであるとみるのは、例えば不本意、後悔、用心 (*reluctance, regret, forethought*) などであるが、筆者はこれはアスペクトから派生した意味であると考ええる。日本語でも「～てしまう」は完了を示すとともに、残念・めんどろ・うっかり・不都合といったモダリティを表わすとする分析がある（例えば吉川 (1989: 127-130)）。Traugott (1982) をはじめとする Traugott の一連の研究では、文法化の発展段階において、一般に命題的な意味は語用論的・表出的な意味を獲得する方向へと変化しその逆はない、という一方向性仮説を主張している。筆者はこの仮説に賛同し、ここでもアスペクトへの文法化が、そのあとから一部のモダリティの意味への発展を導いたものと考ええる。

3.3.4. 文法化および補助動詞に関する通言語的な研究成果に照らしてみたこの地域の補助動詞の特徴

まず Heine and Kuteva (2002) の 32 の動詞について検討する。筆者の判断で、これを意味分野と自他によって下記のように分類した。その上で本稿で対象とした言語が *Source* と *Target* の両方に当てはまる補助動詞を使用している場合にはそれを太字で、*Source* のみを補助動詞に使用している場合にはそれを下線で示した。

[位置の自動詞]

STAND > (1) **CONTINUOUS**, (2) **COPULA**; / **LIE** > **CONTINUOUS**; / **EXIST** > (1) **CONTINUOUS**, (2) **H-POSSESSIVE**; / **LIVE** > (1) **CONTINUOUS**, (2) **HABITUAL**, (3) **LOCATIVE COPULA**, (3) **EXIST**; / **STOP** > **PROHIBITIVE**; **SUFFER** > **PASSIVE**; / **REMAIN** > (1) **DURATIVE**, (2) **HABITUAL**; **RETURN** > **ITERATIVE**

[移動の自動詞]

COME > (1) **CONSECUTIVE**, (2) **CONTINUOUS**, (3) **HORTATIVE**, (4) **VENITIVE**; / **GO** > (1) **ANDATIVE**, (2) **CHANGE-OF-STATE**, (3) **CONSECUTIVE**, (4) **CONTINUOUS**, (5) **DISTAL DEMONSTRATIVE**, (6) **HABITUAL**, (7) **HORTATIVE**; / **DECEND** > **DOWN**, **DO** > (1) **CAUSATIVE**, (2) **CONTINUOUS**, (3) **EMPHASIS**, (4) **OBLIGATION**, (5) **PRO-VERB**; / **ARRIVE** > (1) **ABILITY**, (2) **ALLATIVE**, **SUCCEED**, (4) **UNTIL (TEMPORAL)**; / **FALL** > (1) **DOWN**, (2) **PASSIVE**; **FINISH** > (1) **AFTER**, (2) **ALREADY**, (3) **COMPLETIVE**, (4) **CONSECUTIVE**, (5) **PERFECTIVE**; / **PASS** > (1) **AFTER**, (2) **COMPARATIVE**, (3) **PAST**, (4) **PATH**; / **COME FROM** (1) **ABLATIVE**, (2) **NEAR PAST**, /

COME TO (1) BENEFACTIVE, (2) CHANGE OF STATE, (3) FUTURE, (4) PROXIMATIVE, / GO TO > (1) ALLATIVE, (2) FUTURE, (3) PURPOSE; KEEP > (1) CONTINUOUS, (2) H-POSSESSIVE; / CROSS (ACROSS)

[対象物を移動させる他動詞]

GIVE > (1) BENEFACTIVE, (2) CAUSATIVE, (3) CONCERN, (4) DATIVE, (5) PURPOSE;

THROW > **PERFECT**; **USE** > HABITUAL; / **LEAVE** > (1) ABLATIVE, (2) **COMPLETIVE**, (3) EGRESSIVE, (4) HORTATIVE, (5) NEGATION, (6) PERMISSIVE; / **TAKE** > (1) CAUSATIVE, (2) COMITATIVE, (3) **COMPLETIVE**, (4) FUTURE, (5) INSTRUMENT, (6) PATIENT, (7) H-POSSESSIVE; / **GET** > (1) ABILITY, (2) CHANGE-OF-STATE, (3) OBLIGATION, (4) PASSIVE, (5) PAST, (6) PERMISSIVE, (7) H-POSSESSIVE, (8) POSSIBILITY, (9) SUCCEED; / **FOLLOW** > (1) ACCORDING TO, (2) BEHIND, (3) COMITATIVE

[動作・行為の他動詞]

BEAT > PRO-VERB; / **EAT** > PASSIVE; **EXCEED** > (1) COMPARATIVE, (2) ELATIVE;

[言語活動・知覚・知識などの他動詞]

KNOW > (1) **ABILITY**, (2) HABITUAL; / **BEGIN** > (1) FIRST (NUMERAL), (2) FIRST (TEMPORAL), (3) **INCEPTIVE**; / **SEE** > (1) ALLATIVE, (2) PASSIVE; **SIT** > (1) **CONTINUOUS**, (2) COPULA, (3) HABITUAL; / **FAIL** > AVERTIVE; / **SAY** > (1) CAUSE, (2) COMPLEMENTIZER, (3) CONDITIONAL, (4) EVIDENTIAL, (5) PURPOSE, (6) QUOTATIVE, (7) SIMILE, (8) SUBORDINATE; / **LOVE** > (1) AVERTIVE, (2) FUTURE, (3) INTENTION, (4) PROXIMATIVE; / **WANT(PAST)** > (1) AVERTIVE, (2) FUTURE, (3) PROXIMATIVE; / **OWE** > OBLIGATION;

Anderson (2006: 332-373) による 5 種類の図式は下記のようなものである。ここでも本稿で対象とした言語がその用法や用例を持っている場合には太字で示した。ほとんど全部の図式がアルタイ諸言語と朝鮮語、日本語でカバーされることがわかる。

positional schema → STAND, SIT, LIE

i. stand, sit, lie > **progressive** (> present) / ii. stand > **evidential (past)** / iii. stand, sit, lie > **imperfective** / iv. stand > **copula, expletive / dummy auxiliary** / v. stand > habitual (present)

motion schema → WALK/MOVE, GO, COME, LEAVE, FALL, ENTER

i. walk/move > **progressive** (> present) / ii. enter > **inchoative** / iii. go > **inchoative** / iv. go > **translocative (andative, itive)** / v. go > perfective / vi. leave > inchoative / vii. fall > **unexpected action** / viii. come > **cislocative (ventive)**

action schema → GIVE, TAKE, HIT, PUT, SEE, SEND

i. give > **inchoative** / ii. give > **benefactive/ object version** / iii. put > **immediate** / iv. put > **perfective** / v. hit > **perfective** / vi. send > **perfective** / vii. see > **attemptive** / viii. take > **capabilitive** / ix. take > **self-benefactive/subject version** / x. take > **perfective**

change-of-state schema → GROW, BECOME

i. -be[come] > **copula, expletive/dummy auxiliary** / ii. be[come] > **probabilitive** / iii. be[come] > **possibilitive** / iv. be[come] > **capabilitive** / v. be > **progressive (often + LOC)** / vi. grow > **inchoative**

location schema → STAY, SPEND THE NIGHT

i. stay > perfective, durative, progressive / ii. spend night > unexpected action

以上のように、文法化および補助動詞に関する通言語的な研究成果に照らしてみた結果、この地域の言語の補助動詞の特性として次のような点を指摘しておく。以下箇条書きで示す。

- ・動作・行為の他動詞や言語活動・知覚・知識などの他動詞はほとんど補助動詞にならない。この地域の言語で他動詞が優勢でないことはその原因の一つとして考えられるだろう。
- WANT, LOVE などは、モンゴル語や日本語では形容詞によって表現されることが多いと思われる。さらに例えばモンゴル語における前動詞 (preverb, Yamada (2016) 参照) による構造は通言語的に動作・行為の他動詞が文法化した場合の意味をカバーしていると考えられる。
- ・この地域の言語の特性として、存在・所有表現では「ある」による表現が優勢で、「持つ」を持たない（か使用頻度が低い）ため、欧米の言語に見られる HAVE の補助動詞がない。
- ・「いる、ある」の意はチュルク諸語では形容詞で示され、動詞がない。したがって補助動詞等による表現もない。チュルク諸語において「立つ」「座る」「動く」「寝る」と4つもの補助動詞が継続・進行の機能で用いられる一つの原因はここにあると考えられる。
- ・GIVE による他利態の機能は、間接目的語を含む名詞項が文中に出てこないことが多いこの地域の言語特徴と連動しており、発話の容易な理解のため、間接目的語の不在を補って働いているものと考えられる。

4. 結論と今後の課題

4.1. 結論のまとめ

言語接触の観点からは、[1] 補助動詞が影響によって比較的簡単に生じるものであること、[2] モンゴル諸語とチュルク諸語が互いに影響を与え合って補助動詞を発達／維持させてきたこと、[3] Masica (1976) が示した補助動詞の地理的な分布の連続性に関する仮説は支持できないこと、の3点を主張した。

対照言語学的な観点からは、まずチュルク諸語が位置図式と移動図式を Source とし、Source とはかなり異なった文法的意味を実現するタイプの補助動詞を多く持つのに対し、ツングース諸語には補助動詞がなく、あっても本来の意味そのまま文法的に機能するタイプの補助動詞しかないことを示した。その上でモンゴル諸語が両者の中間的な性格を見せることを主張した。アスペクトを主に補助動詞で表現する言語と接辞で表現する言語があり、両者が相補的であることも主張した。

類型論的な観点からは、補助動詞よりも接辞の方がアルタイ型の言語類型に即した形態的手法であり、アスペクトを示す補助動詞はこの地域の地域特徴であることを主張した。アスペクトの持つ中間的性格および抽象的性格が補助動詞による表現をとる原因であると考えた。さらに文法化および補助動詞に関する通言語的な研究に照らして分析することにより、この地域の言語の補助動詞におけるいくつかの地域特徴を指摘した。

4.2. 今後の課題

満洲語と中期朝鮮語についてもデータを示したかったが、時間的に間に合わなかった。各

言語における各補助動詞の使用頻度の違いについても考慮すべきであると考え、これはなかなか容易な問題ではない。まず各言語における補助動詞の文法的な記述をさらに充実させていく必要がある。

本稿では Source となる動詞本来の意味についてはある程度分析し、考察を進めることができたが、Target の方の多種多様な文法的機能については十分に考察することができなかった。特にチュルク諸語とモンゴル諸語において各補助動詞が実現しているアスペクトの意味について、両語族での体系や両語族間での異同を丁寧にみていくことはできなかった。今後は各種のアスペクト機能に関する緻密な対照研究が必要である。いずれも今後の課題とする。

謝辞

ニヴフ語について蔡熙鏡氏より、ユカギール語について長崎郁氏より、フィンランド語について石井晴奈氏より、貴重な諸情報を賜った。本稿の元となった内容は北方言語学会第3回大会で発表させていただき、その場では白尚燁氏をはじめとする方々から貴重なコメントを賜った。記して深く感謝申し上げたい。有益なコメントを下さった2名の査読者の先生方にもお礼申し上げたい。ただし本稿における誤謬は全て筆者の責に帰するものである。

参考文献

- 愛知大学中日大辞典編纂処編 (1996)[1968] 『中日大辞典 増訂第二版』東京：大修館書店
- Anderson, G. D. S. (2006) *Auxiliary verb constructions*. Oxford Studies in Typology and linguistic theory. New York: OUP.
- 青木博史 (2013) 「複合動詞の歴史的変化」影山太郎 (編)『複合動詞研究の最先端 一謎の解明に向けて』215-241. 東京：ひつじ書房
- 保朝魯・賈拉森 (1991) 『東部裕固語和蒙古語』蒙古語族方言研究叢書 016. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- 布和 (1986) 『東郷語和蒙古語』蒙古語族方言研究叢書 007. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- Bulatova, N. and L. Grenoble (1999) *Evenki*. Languages of the world/Materials 141. München; Newcastle: LINCOM Europa.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: A study of the relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- 蔡熙鏡 (2020) 『ニヴフ語サハリン方言の参照文法』東京外国語大学総合国際学研究科に提出の博士論文
- 陳乃雄 (1987) 『保安語和蒙古語』蒙古語族方言研究叢書010. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- Chuluu, Ujiediin. (1998) *Studies on Mongolian verb morphology*. Ph.D dissertation, Graduate Department of East Asian Studies University of Toronto.
- 恩和巴图 (1988) 『达斡尔語和蒙古語』蒙古語族方言研究叢書004. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- 海老原志穂 (2019) 『アムド・チベット語文法』東京：ひつじ書房
- Erdal, M. (2004) *A grammar of old Turkic*. Handbook of Oriental Studies 8, 3. Leiden: Brill.
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*, New York: Routledge.

- Grunina, E. (2005) *Turkmenskij jazyk. Uchebnoe posobie*. Moskva: Vostochnaja literature
- Heine, B. and T. Kuteva (2002) *World lexicon of grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ikegami, J. (1979) [2001] Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen, *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*, Berlin: Akademie-Verlag. [『ツングース語研究』東京：汲古書院 395-396. 所収]
- Johanson, L. (2002) *Structural factors in Turkic language contacts*. London: Curzon.
- ジャクシルク, アクマタリエワ (2014) 『キルギス語の〈持続〉を表わす補助動詞 —jat-, tur-, otur-, jür-を中心に—』東京外国語大学総合国際学研究科に提出の博士論文
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂
- 風間伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について」宮岡伯人 (編) 『北の言語；類型と歴史』241-260. 東京：三省堂
- 風間伸次郎 (1996) 「ヘジェン語の系統的位罫について」『言語研究』109: 117-139. 日本言語学会
- 風間伸次郎 (2010a) 『Udihe Texts 6』ツングース言語文化論集 47. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 風間伸次郎 (2010b) 『ナーナイの民話と伝説 12』ツングース言語文化論集 48. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 風間伸次郎 (2014) 「日本語の類型について —「アルタイ型言語」の解明を目指して—」北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク(編)『北方言語研究』4: 157-171.
- 風間伸次郎 (2020) 「アルタイ型言語の語順特性およびそれと内的関連性を持つ諸特徴について」『北方言語研究』10: 17-40.
- 風間伸次郎・菱山湧人 (編著) (2020) 『チュヴァシュの言語と文化 1』アルタイ言語文化論集 1. 東京：東京外国語大学
- 小泉保 (1994) 『ウラル語統語論』東京：大学書林
- 久保智之・児倉徳和・庄声 (2011) 『シベ語の基礎』2011年度言語研修 シベ語テキスト 1. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Kullmann, Rita and D. Tserenpil (1996) [2006 (第4版)] *Mongolian Grammar*. Hong Kong. Jenso. Ltd. (第4版は Ulaanbaatar: Admon Co., Ltd.)
- Kwuklipkwukeyenkwuwen [国立国語研究院] (1999) *Phyocwun kwuke taysacen*. [標準国語大辞典] Twusantonga.
- 李翊燮・李相億・蔡琬 (2004) 『韓国語概説』梅田博之監修・前田真彦訳 東京：大修館書店
- 李樹蘭・仲謙 (1986) 『锡伯語簡志』中国少数民族语言简志丛书 北京：民族出版社
- Masica, C. P. (1976) *Defining a linguistic area: South Asia*. Chicago: University of Chicago Press.
- Maslova, Elena (2003) *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 松村一登 (1992) 「マリ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第4巻』155-164. 東京：三省堂
- Mattissen, J. (2003) *Dependent-Head Synthesis in Nivkh: A Contribution to A Typology of Polysynthesis*. Amsterdam: John Benjamins.

- 長崎郁 (2003) 『コリマ・ユカギール語の記述研究 ―形態論を中心に―』千葉大学社会文化科学研究科提出の博士論文
- 長崎郁 (2021) 「コリマ・ユカギール語の Supine ―統語機能と言語接触―」『北方言語研究』11: 17-35.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2010) 『現代日本語文法①』東京：くろしお出版
- 岡田和行・向井晋一 (2006) [2016 改訂]. 「東外大言語モジュール：モンゴル語文法モジュール」
- 大崎紀子 (2017) 「チュルク語補助動詞についての研究ノート」「チュルク諸語における膠着性の諸相」2017 年度第 2 回研究会レジュメ
- 小沢重男 (1984) 『元朝秘史全釈 (上)』東京：風間書房
- 小沢重男 (1986) 『元朝秘史全釈 (中)』東京：風間書房
- 小沢重男 (1989) 『元朝秘史全釈 (下)』東京：風間書房
- 小沢重男 (1993) 『元朝秘史蒙古語文法講義』東京：風間書房
- 清格尔泰 (1991a) 『土族語和蒙古語』蒙古語族方言研究叢書 013. 呼和浩特：内蒙古人民出版社
- 清格尔泰 (1991b) 『蒙古語語法』内モンゴル人民出版社
- Riese, T., J. Bradley, E. Yakimova, G. Krylova (2017) *Онлай марий йылме: A Comprehensive Introduction to the Mari language*. Vienna: University of Vienna.
- Sanzheev, G., T. Bertagaev i Ts. Tsydendambaev (1962a) *Grammatika Burjatskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Izd. vostochnoj literatury: Moskva.
- Sanzheev, G., T. Bertagaev i Ts. Tsydendambaev (1962b) *Grammatika Burjatskogo jazyka. Sintaksis*. Izd. vostochnoj literatury: Moskva.
- 塩谷茂樹 (2006) 『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』大阪外国語大学学術研究双書 35. 大阪：大阪外国語大学
- Shönig, C. (2006) Turkmen, L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 261-272. New York: Routledge.
- 関一雄 (1977) 『国語複合動詞の研究』東京：笠間書院
- スチンガルラ (2020) 『モンゴル語の方向性を持つ補助動詞について ―内モンゴルの文語資料を中心に―』東京外国語大学総合国際学研究科に提出の博士論文
- 高島尚生 (2008) 『基礎トゥヴァ語文法』東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
- 竹内和夫・福盛貴弘 (2012) 『トルクメン語入門 ―キリル文字編―』東京：大東文化大学外国語学部日本語学科福盛研究室
- 徳本文 (2009) 「上代の複合動詞 ―前項と後項の意味関係から―」『立教大学日本文学』102: 114-124
- Traugott, E. C. (1982) From propositional to textual and expressive meanings: Some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In *Perspectives on Historical Linguistics* [Current Issues in Linguistic Theory 24], Winfred P. Lehmann & Yakov Malkiel (eds.), 245-271. Amsterdam: John Benjamins.

Yamada, Yohei (2016) “Breaking-verbalization” of Mongolian preverb. *Altai Hakpo*. 26: 103-118.

安田哲 (2006) 「ビルマ語の動詞句の構造について」『思言』 1: 69-75

吉田欣吾 (2010) 『フィンランド語文法ハンドブック』 東京：白水社

吉田欣吾 (2019) 『パスポート初級フィンランド語辞典』 東京：白水社

吉枝聡子 (2011) 『ペルシア語文法ハンドブック』 東京：白水社

吉川武時 (1989) 『日本語文法入門』 東京：アルク

付録 1：表 1 における実際の形式

(チュルク諸語には一般に同時副動詞形の接辞 -A と継起副動詞形の接辞 -Ip があるが、それぞれ大文字の A と P で示した。PP は過去形動詞 (past participle) を示す。トルコ語の諸形式で # に後続しているものは形動詞形などに後続するもので、Göksel and Kerslake (2005: 156) が自由補助動詞と呼ぶものである。)

STAND (Ma) šogal-, šogalt-, šog-, (Ch) täp-, (Tr) (-y)Adur-, #dur-, (Tm) P dur-, -maGa dur-, (Chgt) A tur-, (Krg) A tur-, P tur-, PP tur-, (Tt) A tor-, P tor-, (Tj) (istodan) , (Uz) P tur-, -(i)p/-pti , (N Uy) P tur-, (-pti), (Uy) tur-, (Xk) (-tür etc.), P tur-, (Tv) P/pajn tur-, (Sx) A tur-, P tur-, PP tur-, COME , (Ma) mij-, tol-, (Ch) pür-, (Tr) (-y)Agel-, #gel-, (Chgt) A kel-, P kel-, (Krg) P kel-, (Tt) A kil-, P kil-, (Tj) omadan, (Uz) P kel-, (N Uy) A kel-, (Uy) käl-, (Xk) P kil-, (Tv) P kær-, (Sx) P kel-, GO (Ma) kaj-, košt-, (Ch) kaj-, (Tm) P bar-, (Chgt) P bar-, (Krg) P bar-, (Tt) A bar-, P bar-, (Tj) raftan , (Uz) A bor-, P bor-, (N Uy) P bar-, (Uy) bar-, (Xk) P par-, (Tv) A/pajn/kaš baar , (Sx) P bar-, SIT DOWN (Ma) šinC-(-am), šinC-(-em), (Ch) lar-, (Tm) P otur-, (Chgt) P oldur-, (Krg) P otur-, PP otur-, (Tt) P üür-, (Tj) nishastan , (Uz) P o'tir-, (N Uy) P oltur-, (Xk) P odır-, (Tv) P/pajn olur , (Sx) A olor-, P olor-, PP olor-, MOVE (Ch) šüre-, (Tr) (-Iyor-) , (Tm) (-yAAr-), P jör-, (Chgt) P yürü-, (Krg) A jür-, P jür-, PP jür-, (Tt) P yör-, (Tj) gashtan, (Uz) P yur-, (N Uy) P yür-, (Uy) yorı-, (Xk) P cör-, (Tv) P/pajn çoruur , (Sx) A sirit-(visit), P sirit-, PP sirit-, REMAIN STAY (Ma) kod-(-am) , (Ch) yul-, (Tr) (-y)Akāl-, #kal-, (Tm) P gal-, (Chgt) A qal-, P qal-, (Krg) A kal-, P kal-, (Tt) A kal-, P kal-, (Tj) (mondan) , (Uz) P qal-, (N Uy) P kal-, (Uy) kal-, (Xk) A xal-, P xal-, (Tv) A xonar , (Sx) P xaal-, GIVE (Ma) pu-, (Tr) (-y)Iver- , (Tm) A ber-, (Chgt) A ber-, (Krg) A ber-, P ber-, (Tt) A bir-, P bir-, (Tj) dodan , (Uz) A ber-, P ber-, (N Uy) A bär-/wär-, P bär-/wä-, (Xk) A pir-, P pir-, (Tv) P bæer, A bæer , (Sx) A bier-, P bier-, TAKE, RECEIVE (Ma) nal-, ertar-, (Tm) P al-, (Chgt) A al-, (Krg) A al-, P al-, (Tt) A al-, (Tj) giriftan , (Uz) A ol-, P ol-, (N Uy) , (-y)ala-, (-y)AlA-, -Ib al- > (-wal-) , (Xk) P al-, (Tv) P alir, A alir , (Sx) P il-, SEE (Ma) onč-, (Ch) pāx-, kur-, (Chgt) A kör-, (Krg) A kör-, P kör-, (Tt) A kür-, (Tj) didan , (Uz) A ko'r-, P ko'r-, (N Uy) P kōr-, (Xk) P kör-, (Tv) P köör , (Sx) P kör-, LIE DOWN (Ma) voz-, kij-, (Ch) vürt-, (Tm) P yat-, (Krg) A jatir-, P jat-, PP jat-, (Tt) P yat-, (Uz) (-a)yotir-, (-a)yap-, (-a)yap- , (N Uy) Ib yat- > -Iwat-, (Xk) (-ča-/če-) , (Tv) P/pajn čidar , (Sx) A sit-, P sit-, PP sit-, LEAVE, RELEASE (Ma) kod-(-em), lekt-, (Tm) P git-, (Krg) A ket-, P ket-, (Tt) P kit-, (Tj) sar dodan , (Uz) P ket-, (N Uy) P ket-, (Uy) id-, (Tv) P kaar, A kaar, THROW (Ma) kudalt-, kiškaš-, šu-, (Ch) pārax-, (Chgt) P tašla-, (Krg) P tašta-, (Tt) P tašla-, (Tj) partoftan , (Uz) P tašla-, (N Uy) P tašla-, (Sx) P kebis-, SEND (Ma) kolt-, (Ch) yar-, (Tm) P Goyber-, (Chgt) A yibAr-, (Krg) P jiber-, (Tt) P jibär-, (Tj) firistodan , (Uz) P yubor-, (N Uy) (-AwAt-) , (Xk) (-iš- etc.), GO OUT (Ch) tux-, (Tm) P cik-, (Chgt) P cik-, (Krg) P cik-, (Tt) P čik-, P čigar-, (Uz) P chiq-, (N Uy) P cik-, (Xk) P sīx-, BECOME (Tr) #ol-, (Tm) P bol-, (Chgt) A bol-, P bol-, (Krg) P bol-, (Uz) P bol-, (N Uy) P bol-, (Uy) bol-, (Tv) P bolur, PUT, KEEP (Ma) opt-, pišt-, šind-, (Ch) xur-, (Tm) P goy-, (Krg) A koy-, P koy-, (Tt) P kuy-, (Uz) P qoy-, (N Uy) P koy-, GET DOWN (Chgt) A tüš-, (Krg) A tüš-, (Tt) A töš-, (N Uy) P cüş-, (Xk) A tūs-, P tūs-, (Sx) A tūs-, PUT IN (Ch) par-, (Chgt) A sal-, (Krg) A sal-, P sal-, (Uz) A sol-, P sol-, (N Uy) P sal-, (Xk) P sal-, BEGIN (Tm) -maGa bašla-, -Ip uGra-, (Chgt) A bašta-, (Tt) A bašla-, (Uz) A bašla-, (Xk) P pasta-, (Sx) P saGlaa-, P šaGlan-,

FINISH (Ma) pitar-, (Ch) pëter-, (Tm) P Gutar-, (Krg) P бүт-, (Uy) түкAt-, (Sx) P бүтер-, P бүт-, KNOW (Tr) (-y)Abil-, (Tm) P bil-, -Ta bol-, (Chgt) A bil-, (Tt) A bel-, (Uz) A bil-, (Xk) P pol-, MISS FAIL (Tr) (-y)Ayaz-, (Chgt) A yaz-, (Tt) A yaz-, (Uz) A yoz-, (Sx) A sīs-, ENTER (Chgt) A kiriš-, (Krg) P kir-, (Tv) P kirer-, (Sx) P kiir-, LOOK, WATCH (Tt) P kara-, (Uz) P boq-, P qara-, (N Uy) P bak-, COME CLOSE (Chgt) A yavuš-, (Krg) A jazda-, P jazda-, PASS (Tm) P geč-, (Tj) (guzashtan), (Uz) P öt-, (N Uy) P öt-, HIT (Xk) A sogar-, (Tv) A šawar-, (Sx) A oGus-, FALL (Ch) ük-, (Tr) #düş-, (Xk) A düžer, DO (Tr) #et-, #eyle-, (N Uy) -Ib At- >(-wAt-), PULL (Xk) A tirtar-, (Sx) A tart-, REACH (Ma) šu-(Ch) šit-, BEND (Krg) P iy-, WRITE (Tt) A mataš-, LEARN (Sx) A üören-, BE (Uy) är-, RISE (Tj) baromadan, TAKE OUT (Ch) kălar-, BE FOUND (Tr)#bulun-, COMAND (Tr) #buyur-, WIN (Ma) seņ-, LIVE (Ma) il-, LEAD OUT (Ma) lukt-, STOP (Ma) pīt-, FILL UP (intr.), (Ma) tem-, CARRY OUT (Ma) šukt-, HOLD (Uy) tut-, JUMP/RUN (Tv) A xaliir-, DESTROY (Uy) alk-

付録 2：表 2 における実際の形式

(モンゴル諸語の同時副動詞形の接辞は言語によって -ž / -dʒi / -žA / -dʒi / -dʒə / -dʒ / -ju などだが、言語ごとの違う形式を示した。継起副動詞形を形成する接辞は -AAd / -AAr など、さらに他の副動詞形もある。シベ語の同時副動詞形接辞は -me、ソロン語のそれは -m、ソロン語の継起副動詞形接辞は -čči である。)

GO (Si) -m javə-, (SY) 語幹 hanə-, (Do) -dʒi ətʃi-, (MS) -ju yabu-, (M) -ž jav-, (B) -žA jaba-, (Da) -AAr jau-, (S) -m ul-, GIVE (Do) -dʒ og-, (Tu) -dʒə/-aanə Gu-, (Bao) -dʒi əkə-, (MS) -ju ög-, (M) -ž ög-, -AAd ög-, (B) -žA üg-, (Da) -dʒ ukʷ-, (S) -m buu-, SIT DOWN (SY) -Gaa/語幹 suu-, (Tu) -dʒə/-aanə sau-, (Do) -dʒi sau-, (MS) -ju sa'uu-, (M) -ž suu-, (B) -žA huu-, (S) -m təgsii(ji)-, TAKE RECEIVE (SY) -dʒ ab-, (Tu) -dʒə/-aanə avu-, (Do) 語幹 agi-, (MS) -ju ab-, (M) -ž av-, -AAd av-, (B) -žA aba-, -AAd l aba-, (S) -čči ga-, CAN (Do) 語幹 şida-, (Tu) -dʒə/-aanə şda- (Bao) 語幹 şda-, (M) -ž čad-, (B) -žA şada-, (Da) -dʒ fada-, (S) -m ətə-, FINISH (Si) -me waje-, (Bao) 語幹 warə-, (MS) -un bara-, (M) -ž bar-, -AAd bar-, -ž duus-, (B) -žA duurge-, -žA duure-, (Da) -dʒ bar-, (S) -m ət-, CANNOT (SY) 語幹 jida- (Tu) -dʒə/-aanə ada-, (Bao) 語幹 jada-, (Do) 語幹 da-, (M) -ž jad-, (B) -žA jada-, (Da) -dʒ jad-, COME (Si) -m dʒi-, (SY) -(G) -AA ir-, (Do) -dʒi irə-, (M) -ž ir-, (B) -žA jere-, (Da) -dʒ ir-, -dʒii ir-, -AAr ir-, GO OUT (SY) -dʒ gar-, (Tu) -aa gar-, (MS) -ju gar-, (M) -ž gar-, (B) -žA gara-, (Da) -dʒ gar-, BECOME (Si) -me o-, (SY) -dʒ bol-, (M) -ž bol-, (B) -žA bolo-, (Da) -dʒ bol-, (S) -m oo-, DO (SY) -dʒ əlge-, PUT KEEP (Tu) -dʒə/-aa gee-, (MS) -ju talbi-, (M) -ž xocro-, (B) -dʒ tal-, BEGIN (Si) -m dirivə-, (M) -ž exel-, (B) -žA exil-, (Da) -dʒ əurkəə-, (S) -m əkkəə-, THROW (SY) -dʒ əGər-, (MS) -ju o'oor-, (M) -ž orxi-, [-čix-], -ž xaja-, (B) -žA orxi- ~ (-žArxi-), -žA xaja-, SEE (SY) -dʒ edʒe-, (M) -ž üz-, -AAd üz-, (B) -ž üze-, (Da) -dʒ udʒ-, (S) -m isi-, LEAVE RELEASE (MS) -ju ile-, (Da) -dʒ iŋf-, -AAr iŋf-, BE (M) -ž baj-, -AAd baj-, -sAAr baj-, (B) -dʒA baj-~(-dʒAj), (B) -žA baj-, (Da) (-dʒaa-), FIND (M) -n ol-, -ž ol-, -AAd ol-, (Da) -dʒ ol-, (S) -m bax-, STAND (Si) -m ila-, (Do) -dʒi bi-, (Da) -dʒ bai, REACH (MS) -ju yorči-, (M) -ž oč-, -AAd oč-, (B) -žA ošo-, -An ošo-, ENTER (SY) -dʒ ərə-, (M) -AAd or-, (B) -žA oro-, LIE DOWN (Si) -m dudu-, (M) -ž xevt-, (B) -žA xebte-, TAKE OUT (M) -ž garga-, (S) -čči yuuguu-, KILL (Tu) -dʒə/-aanə ala-, (Do) -dʒi ala-, KNOW (M) -ž med-, (B) -žA mede-, WIN (M) -ž jal-, -ž dijl-, (B) -žA hala-, MISS FAIL (SY) -geed alda-, (M) -ž ald-, (B) -An alda-, MOVE (Si) -m aci-, SEND (Si) -m əinda-, PUT IN (S) -čči nəə, REMAIN STAY (MS) -ju qočor-, RISE (Do) 目的副動詞形/語幹 tɛiji-, FIT (Si) -m atʃənə-, LIVE (B) 語幹 suu-, OPEN (Da) 目的副動詞形/語幹 kaiji-, NEED (Bao) 語幹 kər-, DO (B) -AAd ge-, PULL (B) -An tata-, TRY (B) turša-, HAVE TIME TO DO (M) -ž amži-, HAVE EXPERIENCE IN ~ING (S) -m uŋgur-, BE SEEN (M) -ž xaragd-, SPREAD (M) -ž tar-

On the Distribution of Auxiliary Verbs in Altaic-type Languages

Shinjiro KAZAMA

(Tokyo University of Foreign Studies)

Auxiliary verbs are used in some Altaic languages and their surrounding Altaic-type languages. In this paper, “auxiliary verb” has been defined as “a grammaticalized verb following a converbial form of a verb.” The target languages are Altaic languages, Korean, and Japanese. Additionally, this paper focuses on the (mainly Altaic-type) languages that surround these languages. In this study, I investigated the distribution of auxiliary verbs in the above-mentioned languages as widely as possible, and reached the following conclusions.

First, from the perspective of language contact, (1) auxiliary verbs relatively easily occur by influence, (2) Mongolic and Turkic languages have influenced each other to develop or maintain auxiliary verbs, and (3) the hypothesis about the geographical distribution of auxiliary verbs proposed by Masica (1976) was not supported by this study.

Second, from a contrastive linguistic point of view, the Turkic languages have various types of auxiliary verbs that realize grammatical meanings through the position schema and the motion schema, which differ significantly from the source; however, Tungusic languages have almost no auxiliary verbs, and the limited auxiliary verbs that are present are only ones that function grammatically with their original meanings. Furthermore, the Mongolic languages show an intermediate character between the Turkic and Tungusic languages. I have argued that there are languages that express aspect meanings mainly with auxiliary verbs and those that do so with suffixes, and that these are distributed complementarily.

Third, from a typological point of view, I have argued that suffixes indicate a morphological method that is more relevant to the Altaic-type features than the auxiliary verbs; moreover, I have maintained that auxiliary verbs indicating aspectual meanings are areal characteristics of this region. Therefore, I believe that the intermediate and abstract characteristics of the aspect meanings led to the usage of these auxiliary verbs. Thus, by analyzing in light of the crosslinguistic studies on grammaticalization and auxiliary verbs, I have pointed out some regional characteristics of auxiliary verbs in the languages of this region.

(かざま・しんじろう kazamas@tufs.ac.jp)